

---

# 君VSあたし

美月 花音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君VSあたし

### 【Nコード】

N0856F

### 【作者名】

美月 花音

### 【あらすじ】

男勝りな主人公・飛鳥と、圭太が繰り広げる、痛快コメディー！  
！これを読んで、面白く思ってくれればうれしいです！！

ラウンド1・宿題論争！！

あたしは日高飛鳥。二年のころから同じクラスの中原圭太に片思い  
ひたかあすか なかはらけいた

あたしには不思議な力があります。それは人のコンプレックスを見抜くことができること。あんまいい能力ではないし、力も少ししかないからあんまりわからないけど、好きな人 圭太のことを知ることができから、まあよしとするけどね。

圭太はスポーツ万能、勉強もトップクラス。文句なしの万能人間だ  
けど、圭太には大きなコンプレックスがあるみたいなんだ。大き  
すぎて、あたしには全部はわからない。

けど、少しだけならわからないこともない。圭太は昔ある大きな傷を負って、ある感情が無くなってしまうたみたいんだけど、その大きな傷と、ある感情が何なのかはわからないんだ・・・

ある日のこと。あたしは圭太を探して廊下 教室 廊下 教室・・・を100往復ぐらいして、その後ずつとろろろしていた。(20分間の中休みの間に100往復・・・ある意味すごい！?)でも圭太はいなかった。宿題忘れてたからやんなきゃいけないのになあ・・・(圭太は勉強はできるけど宿題は基本的にやらない主義)

圭太がやるべきことをやらないはずはないと思うけど・・・？  
 と思ったときに圭太発見！！！！  
 「けええええいいいいいいたああああああ！！！！！！どおこ  
 おおおにいいいつてええたあああのおおおお！！！！！！」

「図書室。辞書借りに。」

あたしの思いつきり怒りをこめた言葉をあつさり無視して冷静にいった圭太はあたしの横をすり抜けて教室に戻っていった。その圭太の背中に向かって、あたしは皮肉をこめて言った。

「中原さあくん？あと休み時間3分しかございませんがどーするおつもりでしょーかあ？

（怒）」

「しらね」

「しらねじゃないやい！！ちゃんとやりやがれこのヤロー！！あとお前図書室にこもって17分間ナニやってやがった」

「献花」

「・・・・・・?!」

オイオイ献花ってどういうことだよ 図書室の中で誰かがポツクリご愁傷様な運命になったんだったら分かるけどよオイ そんな簡単にご愁傷様になるわけないだろうがオイ

あつそうか字が間違ってたんだ・・・ケンカ!?

お前本読みながらケンカすんのか高度だなオイ すげえなオイ・・・ はっ!!!!

ついつい突っ込みしまったよオイ 読者の皆さんスイマセン。後オオイオイ連呼してスイマセン。以後気をつけますので。

「おーい日高あ？お前一人でなに突っ込んでんの？全部丸聞こえだし。誰に謝ってんだよお前頭おかしくなったか？まあ元からおかしいが」

「圭太あ？ぜえええええんぶきこえてますがあああああ？」「やべっ」

「やべっじゃない！ちゃんと宿題やりやがれええ！あたし学習係なんだから強制的にやらさせるわよ！！」

「あれえ？今月の学習係（うちのクラスは毎月係が変わる）お前だったっけ??」

「そうよ！！忘れてもらっちゃ困るわね……あれ??」

「「今月って……（高島）ゆずばんと赤那ちゃん（川島さん）だ！」」

ゆずばん たかしまゆずな 高島柚菜と赤那ちゃん（圭太が呼んでる） かわしまあ 川島赤那とは、クラスの美少女コンビで、しかも川島さんに圭太がデレデレ状態。だから、彼女はあたしの敵なのである。

「あれえ？おかしいなあ……？じゃああたしは……?」

「お前一学期に学習係やっただろ」

「あっ！！！」

そうだった！あたしは一学期最後 七月の係決めに、学習係に立候補したんだ。そして、十数人の立候補者の中で、じゃんけんで圧勝し、学習係になったんだった！

（それにしても何であんなに立候補したんだろー？しかも男子圭太一人だけだったし、後みんな女子だった。しかもみんなすんごい目つきしてた。なんか

「あたしが学習係になれなかったらなつた人をヤツテヤル」  
みたいなオーラ出してたし。なんでだろー？）

にぶいね飛鳥は。みんな圭太狙いに決まってるでしょうが。

「なんか作者の声きこえたけどきにしないでおこーっと」

気にしろ。

「おーい日高またナニひとりでしゃべってんだあ？しかも今度は作者とか言ってたし。マジで頭狂ったあ？」

「圭太あ？そんなことよりさあ？はやく宿題やったらああ？そーしないと学習係の前で放課後宿題やらされますよお？？」

「いーもん！いーもん！赤那チャンに教えてもらうんだからいーもん　うるせえオンナの前で宿題なくていいからいーもん　」

うるせえオンナで悪かったね。それはそうと・・・

「圭太、今日川島さん休み。」

「はひ？」

「ということで五年三組法律により（というか先生の言いつけにより）、一学期最後の学習係、すなわちあたしとゆずぼんで教えまー



## ラウンド1・宿題論争!!（後書き）

さて飛鳥は圭太に、どんな声で「早く宿題やってしまえ」といったのでしょうか？

ここは・・・ご想像にお任せします。



「いや、なんでもないけど、あたしを頭変呼ばわりしたのは聞きずてならないねえ？よし、レーズンパンもらう」

「そこ戻んのかよ！ていうか俺のレーズンパンだぞ！！」

「あたしのよ！」「俺のだ！！」・・・。

はい、なんか二人がもめてきたので、ここは作者から飛鳥に見つからないようコッソリと現在の状況を説明します~~~~~！

飛鳥はレーズンパンが大好き。圭太もレーズンパンが大好き。

そして今日の給食にはレーズンパンが入っている。

しかも今日、飛鳥の親友、柚菜　高島柚菜が休み。

となると、レーズンパン大好き人間の、飛鳥と圭太、その他もろもろが黙ってるはずはない。

さあ！奪い取れ！

とまあ、こんな訳です。さて、今回は飛鳥に見つからないようにくれぐれも注意しながら、飛鳥視点・作者視点を交えてお送りしたいと思います〜

ではでは、まずは作者視点で本編をどうぞ〜

「あんだ、コスプレが趣味ね、このオタク」

「ぐほっ！！」

「えーと、あんたは……最近ハゲテルネ〜〜〜〜……うそん！若いのに！！  
ご愁傷様」

「うつ、なんか心が痛い……」

おや、飛鳥が自分の能力使ってコンプレックス軍団をばっさばっさと倒しております！

（飛鳥の詳細は、第一話をどうぞ！）

うつ、見てるだけでなんか心が痛みますね〜〜〜！？

圭太のほうは・・・おっと、レーズンパンに手をかけた！！盗み食いしようという魂胆か！！そうはいかない！

飛鳥が気づいた！！風のようなはやさで、圭太を吹き飛ばす！！

しかし圭太も負けていない！神のような速さで、飛鳥を押しつけ、きらめく目でレーズンパンを見ている！！

飛鳥も立ち上がり、圭太と睨み合う！！

ここからは、飛鳥視点でお送りします

「圭太あゝ？そのパンよこさないとあんたが数秒後にご愁傷様の運命になるわよ？」

「じゃあ日高、俺によこさねばお前の個人情報地球全体に広がってついには宇宙全体に広がるけど？」

「よこせ」

「俺によこせ」

圭太の意地っ張り。くれたっていいのに。

「じゃあここは公平にじゃんけんで」

「賛成！」

うむ、それはいい考え。圭太もたまにはいいこというわね。

「それでは、じゃんけん・・・」

「「ぽん!!」」

圭太がパー、あたしがグー。

負けた・・・ま、しょうがないか。

「あっちむいてホイ」

「ホイ」

あれれ!!?なんかあっち向いてホイになつてますがナンデスカこの状況!?

「俺のかち」

「えええっ!!!!」

うそん！なんか勝負ついちゃった！！ひどっ！

「というわけで、このパンは俺のパンに決まり！」

「えええゝ（＞〇＜）」

圭太あ・・・何でじゃんけんでもあつち向いてホイでも勝ちますかあ？その秘訣を俺に教えるコノヤロウ。

「いつただきまあゝ・・・」

ガラガラッ！！！！

不意に扉が開いた。そこを見ると・・・

「ゆずぽん！？」

そう、そこにいたのは、休んだはずの親友、ゆずぽん  
高島柚菜  
だったのだから。

幸か不幸か、パンは圭太の口の前だった。

ついでに、ほかのおかずも少しずつ、ほんとに少しずつ、ゆずぽんが食べられる量が奇跡的に残っていた。

「あゝ良かった！給食に間に合って！」

「あれ？ゆずぽん？休みじゃなかったの？」

そう聞くと、ゆずぽんがきよとした。

「え？違うよ？おかしいなあ？先生に言ったんだけど・・・？」

え？先生に言った？どーゆうことお？

「おお！きたか高島！」

振り向くと、そこにはわがクラスの担任・阿辰あたつのりみち則道先生が。

「先生！ゆずぽ 高島さん、休みじゃないんですか？」

聞くと、今度は先生がきよとした。

「俺はそんなこと言った覚えはないぞ。」

「えっ??だつて先生、「今日は高島は休み」っていったじやないですか?」

「おれは、

「今日は高島は休みか、わからないから給食残しといてくれよ」  
つて言おうとしたんだよ!

そしたら途中で日高と中原、その他もろもろが歓声、というか雄たけびを上げたんだ。まあなるようになれと思ってほうっっておいたんだがなあ・・・」

「「「まぎらわしいですよお」」「」」

あたしたちはみんなでその場で一時的に死んだ。

「あのお、みんな?あたしに給食食べさせてくれないかなあ?おなかペコペコなんですけどおゝ!!!!!!!!!!ハオハ」

## ラウンド2・給食合戦！（後書き）

作者&主人公が絡む話はどーでしたか？

今後こんな話がたくさんですのでよろしくです〜！

## ラウンド2、5・おまけ

はい！こんにちは。作者の美月花音デス。気軽に花音さんでいいですよ。

って！自己紹介してる場合じゃなくて！

今回は番外！「これまでの登場人物」を紹介したいと思います！

最初は、主人公・日高飛鳥さんです！

男勝りで意地っ張り、人のコンプレックスを見抜くことができる超能力者、レーズンパンと圭太が大好きな小五女子！

「誰が男勝りだ！意地っ張りだ！超能力っていうな！レーズンパンは言うことなし！」

圭太が抜けてる。

「あ、本当だ」

はいはい、続きまして、中原圭太君！

スポーツ万能、成績秀才！普段はボケ役、時々ツツコミ！ついでに女子にモテモテ！レーズンパンが大好きで、赤那ちゃんにはデレデレメロメロな小五男子！

「誰がツツコミだ！誰がボケだ！頭がボケてるのは日高だ！」

「圭太あゝ？ぜえゝんぶきこえてますがああ？」 「やべっ」

「やべっじゃなあゝい！！！」

はいはい、なんか一話と同じ展開になりそうなのでほっときましょう

う。

三人目は、高島<sup>たかしまゆすな</sup>柚菜さん！

読めますよね？いちおルビふっときましたよ！

え〜っと、主人公・飛鳥の親友で、超美少女。チョコパフェをこよなく愛し、メロンパンをこよなく嫌う、おっとり系の小五女子！

「花音さ〜ん」

なんでしょうか？

「私だけ説明文少なくありませんか？」

だいじょぶですよ。飛鳥の次に少ないと思います。

「ちょっと主人公の説明が少ないってどういう意味？」

無視しましょう。

「オイコラ。」

はい、次は、美少女二人目！川島<sup>かわしまあかな</sup>赤那さん！

柚菜と並ぶ美少女で、実は大手会社社長の娘でもある超お金持ちお嬢様！

そして圭太がメロメロデレデレな女の子！

クリームパンをこよなく愛し、野菜炒めをこよなく嫌い、実は米アレルギーの少女です！

赤那、圭太のことはどう思う？

「ん〜、ストーカー？」

「ガーン!!!」

おおっと！圭太、無念！

でも、クラスでモテモテの圭太を振るとは、さすが美少女令嬢赤那！

「しつこくするからだよ」

そういつつ飛鳥、楽しそう？

「!?!?!?..んなわけないじゃん.....」

さあ、最後にご紹介するのは！

「「「「われらが担任、阿辰 則道先生!!!!!!」」」」  
ですね。

いつも暴走する飛鳥、圭太たちを見守る24歳独身の元体育教師！  
身長178cm、体重80kgの超大型教師で、じつは甘いもの嫌  
い！

「大型トラックみたいにな！俺はもともとやせてたんだ！」

ほう、また阿辰先生の秘密を解明できたらいいですね

~~~~~緊急募集~~~~~

募集その1！

近々、新キャラを考えております！しかし、名前が決まりません！  
そこで、読者の皆さんに、新キャラの名前を考えてほしいのです！

しかも、二人います！下にキーワードを書くので、考えてみてください！

(1) ネコ。( )

超怪力。人の言葉がしゃべれる。占いが趣味。

(2) ダンゴムシ。

人の言葉がしゃべれる。なぜか体にリボンが絡みついている。口癖は「うぱあ」

募集その2！

作者はこのように、物語のエピソードを伝えるものを、定期的に発行したいと思っています！その名称を、考えてほしいのです！

例 君あた新聞、みづかのタイムズ（これよりいいものを、お待ちしています！）

募集その3！

読者の皆さんで、小説に出演してみたいと思った方、いますか？そんな人を募集します！

当選者は、何話目かで出します！

## 応募方法

募集その1に応募するには、自分の名前<sup>ペンネーム</sup>、応募する方(1)(2)とその名前をかいて、感想、またはメッセージまで！

例 美月花音、(1)、ママナ

募集その2に応募するには、自分の名前<sup>ペンネーム</sup>、応募する名称を書いて、

感想、またはメッセージまで！

例 美月花音、君あた新聞

募集その3に応募するには、自分の名前<sup>ペンネーム</sup>、出演したい名前をかいで、感想、またはメッセージまで！

例 美月花音、出演名 原ハチ ブンコ

たくさんのご応募、お待ちしております！！！！！！

## ラウンド2、5・おまけ（後書き）

締め切りは、ラウンド5までです！皆さんどうぞ奮って応募ください！

（たぶん、好奇心旺盛な読者様がいっぱいいると思いますが、そうでないお客様も応募してみてください！もしかしたら、当たるかもしれないですよ！）

当選者は、気まぐれに発表します！

ラウンド3・組体操と飛鳥猫

「せーのっっ!!!」

「うおりゃあああああ……！！！！！！」

はい、今回も会話で始めました！ども、飛鳥です。今回は、何をやっているか当ててみてください。それでは、本文スタート！！

「王冠！！せーのっっ！！」

「とりや ああああ！！」

「重い〜〜〜!」

「倒れる~~~~!!!!???」

「ドッカーンッッッ！！！！」

はい、またまた飛鳥です。それでは、正解発表！！

今回は、組体操をやってます。しかし、上五つの会話の中に、変なもの  
 が四つ入っているのがわかった人はいますかね？  
 実は・・・・・・

「せんせー！！！！！！！！！！やっぱり五年が六年を持ち上げるのは無理に等しいですよ～～～！！！」

「賛成～～～！！！！！」

五、六年合同で行う組体操は、フツ―は五年が上に乗る、六年は土台になるよね。

しかし、なんか知らないけど、五年が下で六年が上になっちゃったんだよ～～

当然、重くてすべて失敗・・・

「先生！五年が六年を一人で持ち上げるなんて、できません！」

「変えてください!!!」

「そう言われてもなあ……」

わがクラスの担任、阿辰則道先生は後ろを振り返る。

それにつられてあたしたちも後ろを振り返る。すると……!!?

「五年を困らせなきゃこいつらが危ないぜ」見たいな顔つきをした  
六年男子が一人!

さらになんかそいつに捕まっちゃった五年女子が二人!

そしてそこに捕まっているのは……!!!!!!

「ゆずぽん!」

「赤那ちゃん!」

そう、そこに捕まっているのは、わがクラス超美少女コンビ兼、あ

たしの親友ゆずぽん      高島柚菜と、圭太がメロメロデレデレ、  
だけど前回      2、5おまけの時圭太を振った、お金持ち令嬢、  
川島赤那だった！

うちのクラスの超美少女コンビが捕まっている！！！！

あたしたちには一大事だ！緊急事態だ！警察出動だ！

「うちのクラスの超美少女たちをかえせ      !!!!!!!!!!!!!!!」

「さもなくばお前がレースパンになってうちのクラスのレースン  
パン大好き人間たちに食われるぞ      !!!!!!!!!!!!!!!」  
「！！」

五年三組全員で、叫びながら突進！

六年男子をぶっ飛ばしぶっ飛ばされぶっ飛ばしぶっ飛ばされ……  
……

そして……

「取り返したぞ

！！」

「やったあ——！！！」

「これでうちのクラスは安泰だ——！！」

「……ねえみんな、助けてくれたのはうれしーよ、すんごくうれしーよ？」

でもさ、「うちのクラスは安泰だ——」て言うのがすーごく気に食わないなあ??？」

「あたしたち飾り？展示物？見せ物？そんな扱いですか。ナルホド。よぉ〜つく分かりました」

「おい！美少女コンビを怒らせたのは誰だ！おとなしくでてこい！」

はい、あたしと圭太です。でも白状なんか……

「はい、俺です」

したあああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

なんで？あの意地っ張りで強情な圭太があああ??????

「あのカツアゲ野郎をぶっ飛ばした名誉ある勇敢戦士は俺です」

カツアゲヤロウ？ああ、あの六年男子。そいつをぶっ飛ばした勇敢戦士ねえ？

「名誉あるが抜けてる」

あつそ。でもみんなで倒したんですけど。アンタだけじゃないんですけど？

「ついでにあいつから誘拐料として¥10000申し受けた」

いつ、いつ¥10000！！！！そんだけあれば六年全員買収できるじゃないのよ！

「やるっきゃないわね」

「望むところ」

「はいはい、六年生の皆さん、小遣いがほしい人は組体操で五年を上にくれるかによ」



### ラウンド3・組体操と飛鳥猫（後書き）

にゃあにゃあにゃあ

ちなみに六年を買収した猫は飛鳥猫ですよにゃあ

#### ラウンド4・圭太観察レポート（笑）（前書き）

今回は誰が何を言ってるかまったく書いてないのです！  
なので推理してみてください！  
（飛鳥視点で、レポートを発表してるのはゆずぽん）

## ラウンド4・圭太観察レポート（笑）

「圭太って何者!？」

はい、疑問点で始まりました。こんにちは、飛鳥です。  
今回は、圭太について迫りたいと思いますにや

「飛鳥？前回の飛鳥猫が残ってるみたいですねあゝ（にやにや）」

「残ってない残ってないぜんぜん残ってないニヤ!!！」

「「ニヤ?」「」

あゝ 思いっきり残ってるうう!!!!!!

「そんな飛鳥は置いといて、今回は圭太を観察してみたいと思います!」

置いてかないでよ、さみしーよう!

観察結果ニヤ

AM8:00

圭太、登校

AM8:20

圭太、ランドセルを片付ける

A M 9 : 0 0

圭太、寝る

P M 1 2 : 0 0

圭太、レーズンパンのにおいでおきる

P M 1 : 0 0

圭太、寝る

P M 3 : 0 0

完全下校

P M 6 : 0 0

圭太、おきる

P M 6 : 0 1

圭太、飛ぶ

終了ニヤ

「・・・・ねえ、圭太ってひたすら寝てるよね」

「ちなみにこれは、飛鳥が休んだときの結果ニヤ。飛鳥が登校した時もあるニヤ」

「ナゼ」

「いや．．．．．なんとなく」

「オイコラ」

「アイコラ？」

「ちがうよちがうよ！あたしの言葉をアダルトな方面に持っていくな！あたしはオイコラっていったの！」

「ナールホド」

「ちなみに観察結果は」

「ごくろり（つばを飲む音）」

「あんま変わんなかった」



「専門家に聞きますと」

「いい！いい！もう聞かない」

「そう、ならいーや」

## 結論

圭太は赤那と飛鳥がいるときはめったに寝ない

圭太はどっちが好き？

## 感想

飛鳥「ほんとに分かん」

以上、圭太観察レポートでしたニヤ

#### ラウンド4・圭太観察レポート（笑）（後書き）

皆さん！ひとつお忘れではございませんか？

レポートの中で、

P M 6 : 0 1

圭太、飛ぶ

つていうのがありましたね？

・・・飛ぶ？

ここはご想像にお任せします（笑）

## ラウンド5・圭太のコンプレックス―圭太視点―

俺は中原圭太。小五の男子だ。

俺にはコンプレックスがある。それは、昔好きだった子に裏切り&暗殺未遂&いじめ&その他もろもろのことがあり、好きという感情が分からないのだ。

だから、俺には好きになった子はいないし、付き合ったこともない。

これからもないと思う。

俺にとって、女は信じられない存在となってしまうたからだ。

だけど、俺には気になっているコが二人いる。

日高飛鳥というツツコミ系女子と、川島赤那というお嬢様女子だ。

赤那ちゃんは、可愛くて素直で俺のタイプにピタンコ!!!

でも、なんか物足りないような感じがするのも事実。

俺は、あの子にすかれてはいないらしい。

前も、みんなの前で振られた。

あの子だって、俺を裏切るつもりなんだ。

どうせ、そんなものさ。

日高は、素直じゃないし、可愛くもないし、俺のタイプでもない。

しかし、笑うととっても可愛い女の子だ。

あいつは、俺にいつもかまってきて、本音は少しうつとうしいのも事実。

でも。あいつといるとすごく楽しくて、嫌なことなんか忘れてしま  
う。

あいつといると、昔好きだった子を思い出すんだ……。

まるで、俺のコンプレックスを消してくれるかのように。

あいつにも不思議な力があって、俺の心を      冷めた心を暖めて  
くれるかのように。

俺は、もしかしてあいつのこと      ？

あいつの、ことが？

．．．だめだ！俺はもう一生恋をしないって決めたんだ。

女はみんな信じられない。みんな俺を裏切るにきまつてる。

みんな、みんな．．．．．！！

俺は、もう恋なんかしないんだから。

それでいいのだ。もう、恋なんか．．．．．

恋なんか、しない。

## ラウンド5・圭太のコンプレックス〜圭太視点〜（後書き）

圭太の詳細が、分かっていただけでしょっか？

これからは、もっともっと面白くなるように努力しますので、読んでくださいね！！！！

募集、締め切りました

## ラウンド6・ヘンテコマラソン大会・準備編

逃げる 逃げる 逃げる

汗と涙を滴らせ みんなで分散 脱走だ

逃げる 逃げる 逃げるおおおお

………こんにちは。飛鳥です。

皆さん、最初からこのへんてこりんな歌を聞いてもらいましてまことにありがとうございますでございます。

皆さんお分かりだと思いますが、このへんてこりんな歌「脱走歌」を作り出した張本人、それは………

「逃げる、走れ、逃げるおおおお」

はい、五年三組出席番号？番 中原圭太その人でありますです。

言っておくけど、この変なしゃべり方は、作者のミスタッチじゃないからね。

あたしが好きで使ってたからね！！！！文句ある？

「「「「ナイ！！！！」」」」

あれま。みんな聞こえてた？

はい、前置きはさておき。

今回のイベントは、マラソン大会なのです！！

そんなわけで、圭太が逃げろだの走れだのの歌を作ってたわけなんですよ。

ちなみに、うちの学校は男女混合でマラソンをする。

というわけで、一学年につき一位の座がひとつしかないのだ！！

そんなわけで、圭太とあたしは、毎回一位・二位を争っている！！

いまんとこ、一位獲得率は圭太のほうが多い。あたし、圭太、圭太の順になってる。

だから、今年あたしが一位取れば、圭太に並ぶ！！！！

だからがんばる！！！！あたしの勝利のために！！！！ただそのためにがんばる！！！！

というわけですから。

それに、あたしはどうしても、勝たなければいけないわけがあるのだ！！！

それは！！今年のみ贈呈される”優勝バッチ”なるものが関係しているのだ！！！！

優勝バッチとは、これを好きな人におくるとなぜか恋がかなうとなぜか有名なバッチなのである！！

この疑問点は、なぜ、マラソン記念のやつなのに、恋をかなえる機能があること。

これだけはなぜか学校七不思議のひとつになっているのだ。

勘のいい方はお分かりであろう。

すなわち飛鳥は圭太に、このバッチを送って告ろうというたくらみだ！！！！

「なんて平凡な！！！！これを考えた作者が恨めしい！！！！」

うるさいな。恨めるもんなら恨んでみやがれってんだ。

「あれ、作者、酔ってる？」

酔ってません。作者未成年だし。十八にもなってないし。この年で酒飲んだら、それこそ不良だって。

「ふーん、作者未成年なんだ。よし、作者の詳細ノートに加えとこ」

アンタなんてモノ作ってんのよ！今すぐ壊せ、ぶっ壊せ！！

「やだ」

くそつ。それでは、ココからは飛鳥視点に戻ります。

「走れ、壊せ、ピー（自主規制）」

「アンタなんで作者が自主規制しちゃうような言葉吐いてんだよ！改める言葉！」

「うるせえ！だから毎度毎度聞くが作者って誰だ！ナニモンだ！食いもんか！」

「あのね！作者はあたしたちの世界の支配者よ！ボタン一押しであたしたちを殺すも非行に走れせるもイヤな展開にもできるのよ！（簡単に言えば）」

「ナルホド。しかしイヤな展開ってどんなことだ」

「ピー」

「自主規制スナ」

「てめえだつてしただろーが」

「うるせ」

はい、変な話はおいといて、っと。

私たちはマラソン大会が近づくとも毎日、朝自習の時間、チャイムが鳴るまでマラソンの練習を兼ねて走る事になっている。そしてその時間、なぜか注目を浴びるのはあたしと圭太。それはなぜか？こういうわけだ。

「ひいひいだかあああにかあああああつ!!!!!!!!!!（日高に勝つ!!!!!!!!!!）」

「けええええいいいたああにいいいまけるかあああああああ!!!!!!!!!!（圭太に負けるかあ!!!!!!!!!!）」

これをいい続けながら毎朝校庭を10〜15周しているのだ。当然、注目が集まらないわけがない。ついでに、あたしたちの状態がそのままなわけもない。

「あー づがれたー！みずのまぜろみずー」

「おれがざぎだー！！」

「あだしがざぎだー！！！」

この始末である。

ちなみに、この声は放課後まで続いたのであった。

## ラウンド6・ヘンテコマラソン大会・準備編（後書き）

続きます。

## ラウンド7・ヘンテコマラソン大会・本編

こんにちは！！飛鳥です！

今日は、待ちに待ちすぎて疲れたマラソン大会です！！！！  
今日こそは、圭太に勝って告ります！！！！

がんばるぞー！！！！！！えいえい・・・・・・

「おー！うがつ！？」

あたしの頭になんかぶつかりました！痛いです・・・・。

「あ、わりい！ヤシのみぶつかった！」

なぜにこんなとこにヤシのみが？

と、言い返そうとしたとき！

「五年生はスタート地点に集まってください！！」

という声がかかったのしぶしぶスタート地点に。  
念入りに準備体操をして準備。

「よーい」

絶対に、優勝して……

「ドン！」

圭太に告白するんだから

!!!!!!!!!!!!!!

はい、ここからは作者視点に変更してお送りします。

おおつと！やはり飛鳥と圭太が先頭に出た！

両者、抜いたり抜かれたりして一歩も隙を見せません！！

ここで、コースの説明をいたします。

場所は河川敷。スタートから1、5キロいったところに、階段があり、そこを上って折り返して、1キロいったところにゴールがあります！

さて、一番初めにゴールするのは誰でしょうか？

おや？圭太と飛鳥、両者の姿がありません！！！！

一体、どうしたのでしょうか！？

ここからは、現在の状況を把握してもらったため、飛鳥視点でお送りします！！

絶対、圭太に負けないんだから！！！！

あれ？なんか右足に違和感を感じるけどなんだろう？

ま、いいや。圭太に負けるのは嫌だから、思いっきり走るのだ！！！！

あれれ？やっぱり右足が・・・・痛い・・・・・・？

筋肉痛かな？こんなときにやだな・・・・・・あれ？

違う！この違和感は、なんだ？

あれ？もしかしてこれって、世間で噂にはなっていないけどたぶん・  
・・・

つつたあああああ！！！！？？

やっぱりつつたのかああああ！！！！！！？

何でこんなときに！そしてなんでこんなタイミングで？

それはともかく！走らなきゃ！あたしのほかに圭太LOVEな人いっ  
っぱいいるんだから！

あたしが最初に・・・・・・・・告らなきゃ・・・・・・・・！！！！

あたしはすごい痛みに、耐え切れずに倒れた。

「・・・・・・・・か？・・・・・・・・だか！・・・・・・・・ひだか・・・・・・・・日高！  
！！！！！！」

目を覚ますと、そこには・・・・・・・・！！？

「圭太！？何でココに！？マラソンは！？一位取れないよ！？」

あたしはいっぱいある疑問をすべて、圭太に攻撃としてぶつけた。  
攻撃魔法・疑問玉をくらった圭太は、混乱した。

だけど、そのこんらんをおさえて、あたしに攻撃魔法・回答玉をぶつけてきた。（回答玉って、さっきの疑問玉の答えね。）

「ばーか。俺はマラソン、お前がいないと楽しくねーの！」

「はい？」

「とにかく、最下位の奴まだきてねえから、最下位にならないうちにいくぞ！」

「え、ちょ、ちょっと！きゃあ！！！！なにすんの圭太！！！！」

「お前その足じゃあるけんだろーが」

なんか軽々と圭太におぶられてしまったあたしは、ゴールまで運ばれた。

その後、当然だがそれを見ていたゆずぽんとかほかのクラスメートに冷やかされた。

でも、あたしはその冷やかしよりも、圭太が言ったあの一言のほうが気になった。

ばーか。俺はマラソン、お前がいないと楽しくねーの！

あの、その言葉、どう受け止めたら良いんでしょうか、圭太さん？

## ラウンド7・ヘンテコマラソン大会・本編（後書き）

とりあえずヤシのみ飛鳥に落っことしてみました（笑）

そんなことはさておき！次のお話からは新展開です！

いろいろすごいこと起こすつもりなんで、お楽しみに！！

あと、猫とダンゴムシ、暴力少女は、サブ小説なんで、気が向いたときだけ更新します。

もっとも、暴力少女は、猫とダンゴムシよりこまめだと思っています。

ラウンド 8・転校生は……元カノ!?

こんにちは！飛鳥です！

今日のHRはとっても楽しみです！

なぜなら、今日は転校生が来るのです！

気さくな子だったらいいと思います！！

「圭太あゝ 今日転校生来るんだよね」

「そついやーそーだっけ。レーズンパン嫌いだったらいいな」

なぜに。

「レーズンパン争奪戦の敵が減るから」

「あたしの心の眩きを聞くな圭太ああああ！！！！！！！！！！」

「聞いちゃ悪いならすべての日高の言動を聞かないけど？」

それなんかサビシイ。

「じゃー前言撤回しろ、日高よ」

「だからあたしの心の呟きを聞くなあああああ……!」

キンコーンカーンコーン

キンコーンカーンコーン

「あ、チャイム鳴った」

「鳴ったねー」

「鳴ったなー」

「いよいよですなー」

「ですなー」

なんか程よくのんびりしてるところに阿辰先生登場……!

「おいそのバカ暴走コンビー。お取り込み中悪いがそろそろ席につけー。転校生紹介するぞー！！！」

「バカですがなにか」

「ハイ転校生を紹介するぞー」

程よく無視されたあたしらは席に着いた。

ちなみに、あたしと圭太の席は列の一番後ろの隣。偶然じゃなくて先生が仕組んだこと。

なんでも、「お前らが後ろだと程よく支障をきたさないし、くつつくと程よく授業が進む」だそう。

先生、グッチョブ！！！！

「転校生さーん」

「はい」

透き通ってて綺麗、それでいて可愛くてしっかりした声。絶対女の子だな。

うちのクラスで一番可愛い声の川島さんだって、顔負けの声だ。

こんな声の持ち主、どんな子だろう

？

「はいつていいぞー」

「はい」

その子が入ってきた。

あたしの第一印象。

「・・・・・・薔薇みたい！」

その通り。ほんとに薔薇みたいに美しい女の子、いや、少女だ。

顔は可愛い卵型、目は大きくてくりつとしてて、まつげも長い。

髪の毛は薄茶色。背中にかかるか、かかないかぐらいの長さだけど、とってもサラサラなのが、後ろからでも分かる。

キレイ！うちの美少女コンビも顔負け！！今日からは美少女トリオに改名だ！！

「・・・・・・・・あれ？」

「・・・・・・・・どした？」

「あいつどこかで会ったわけ・・・・??」

圭太はちよつと疑問みたい。

次の瞬間、圭太の疑問は晴れた。

「朝川菜摘あさがわなつみです。よろしくお願いします。」

「あさがわなつみ・・・・・・・・？お前・・・・・・・・菜摘か！！！！」

「久しぶりだね〜〜圭太。やっぱりここにいたか」

「おまえ・・・・・・・・なんでココに来た」

「うーんとね……………圭太をまた、いじめる為に、かな」

圭太と朝川さんは、いつのまにか教室のど真ん中で睨み合っていた。

「圭太？朝川さんと、知り合い？」

あたしがそう聞くと圭太は、

「俺の元力」

はっきりと、信じらんないよーなことを言った。

「も……元カノ……ですか・あ、あはははは……  
 なんですと?」

「だから、俺の一年のときの彼女だつてば」

「なんですとおおおお——！！！！！！！！！！」

この時、あたしは知らなかった。

この奇怪な転校生  
朝川菜摘が、あたしの恋を狂わせると  
もに、

圭太までも苦しめていくことを  
。

ラウンド8・転校生は……元カノ!? (後書き)

強力ライバル登場ですね！

飛鳥はどうするのでしょうか？

## ラウンド9・質問ぶつけて分かりあおう！

「圭太あ？元カノってどーゆーことか説明しなさい」

「圭太あ？この人は何者か説明しなさい」  
オシナ

ども、飛鳥です。

ただいま圭太は、あたしと朝川菜摘さんに掃除用具入れと本棚の間の小さなスペースに押し込まれて尋問を受けています。

「まず日高の質問。俺は一年の時転校してきたのは知っているな」

「うん。で、それが？」

圭太は一年の時、群馬県にいららしい。そして、二年の春、親の転勤とかで、ココの小学校に来た。

「その一年の時の同じクラスの隣の席にいたのがこいつだったんだ」  
なつみ

「ほっ」

「で、毎日毎日顔をつき合わせてる間にいつの間にか両思いになっちゃって」

「・・・・・・・・ほづ?」

「でカレカノの仲になったと」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふうふうふうふうふうん」

「あの、日高さん?何かお気に召さないことでも?」

ハイありますとも。めっちゃくちゃありますとも。

「あんた、一年でもうモテモテだったのねええええええええええええええええ?」

「さあ?でも一ヶ月十〜二十人ぐらいには告られたなあ」

わお、プレイボーイ。

「なんか意味ちがくない?」

「そーかなー？ってかなぜあたしの心のツブヤキを聞く!!」

「で、菜摘の質問だけど」

無視スンナコノヤロウ。

「ふむ」

「その質問に答える必要はない」

「・・・・・・・・え？」

圭太？優しく教えてあげなよ、かわいそうだよ。

「もう彼女じゃないお前にそんなこと教えても無意味だ」

・・・・・・・・思い出した。

圭太は無意味だと思ったらなにがなんでも口にしない隠れガンコだった・・・・・・・・。

「これで質問終了か。じゃあ、次は俺から菜摘に質問」

「なによ」

「お前はどうしてここに来た」

「だから、圭太を苛める為に！！そして、私たちは別れてないんだよ！！だからもう一度復縁しようとしにきたの！！」

えー！？圭太と朝川さん（めんどいから朝川でいいや）って別れてないの！！！！？？？？

新たな敵じゃー！排除せよー！！

「残念だが、俺は復縁なんかしたくない」

「なんでよ！まだ圭太私のこと好きでしょー！！」

「俺はもうお前のことなんか好きじゃない。とつとと群馬に帰れこの夏みかん」

圭太ナ二言ってるの？てか夏みかんってナニ？朝川のあだ名ですかはいそーですか。

「なつ・・・！！・・・あらそう、ならこっちにも方法があるわ」

そういうと、朝川はこっちに来て、小声で話した。

「飛鳥さん、といったわね。あんた、圭太の事が好きなんだ」

「なぜそれを！！！！」

「あんたの態度見てれば丸分かりよ！だけど、圭太は私がもらっから。どんな手を使ってもね」

それだけいうと朝川はさっさと自分の席に行ってしまった。

「日高、あいつ、なんて言った？」

「圭太はどんな手を使っても私がもらっって・・・」

もちろんあたしが圭太を好きなのはいえなかった。

だって、告白になっちゃうじゃん。

「そっかぁ・・・・・・・・・・」

「圭太、どした？」

圭太がなんか元気ない。なぜだろう？

「日高」

「なに？」

「お前、これから話すこと、誰にも言わないって約束できるか？」

「う、うん」

確認すると、圭太は話し始めた。

誰にもいえないような、苦くて悲しい自分の過去を・・・・・・・・・・。

## ラウンド10・闇と子羊・前編

こんにちは。飛鳥です。

今は、ちよつと圭太の昔の話を聞いています。

「俺は昔、成績ダメダメ、スポーツダメダメの、ダメダメ少年だった。」

今の俺しか知らない人は、そんな俺信じられんだろうがな」

確かに。今の圭太とは正反対だもんね。

「俺は変わりたい　俺はその時思ったんだ。そして菜摘に出会った　今考えたら最凶最悪の女に。今思うと、あの女に出会わなかったら、今の俺はなかったと思う。　いい意味でも悪い意味でもだが。」

どういうことだろう？朝川さんは、圭太を変えてくれた。それはいいことしか考えられない。なのに、圭太は悪い意味でもあるようなことも言った。その悪い意味ってあるんだろうか？

「俺は、席替えであの超人気者の女の隣になった。そこで、俺のことを人気者にしてくれるよう頼んでみたんだ。あいつは快く引き受けた。しかし、『条件があるの』と言われたんだ。その条件とは・・・」

そこでいったん言葉を切ると、圭太は顔を歪めながら話してくれた。

「『あたしが満足できる代償ちよーだい』 あいつはそういった」

代償？なんだろう？そもそも代償って意味何だったけ？

「その代償というのは、『俺の体』だった」

その鼻の下のはしてるアナタ。男の身体に発情してどーすんのよ！鼻の下のはすんなら、続きを聞け続きを！！

「あいつは、その代償を一週間続けられたら人気者にしてあげる　そう言った。だから俺は、代償を受けた。だが　」

圭太は、急にすっごく厳しい＆つらそうな顔になって、続けた。

「そこに待っていたのは、重く苦しい日々と、耐えなければいけないじめだった。」

「圭太！！あたしの鉛筆休み時間内に削って来い！十本全部、あと一分でな！ついでにあたしのランドセルとロッカー休み時間内に掃除よろしく」

「え！・・・・・・朝川さん、それは無理です・・・・・・」

「男ならつべこべ言わずにさっさと削って掃除して来い！！！！」

当然、一分で十本全部なんか削れるわけがない。

ランドセルとロッカーの掃除なんかできるはずもない。

「テメー、やれつつたよな？反抗したならやつちまえっ！！！！」

やつちまえ      その言葉が何を意味するのか。俺はすでに知っている。

「・・・・・・やめっ、やめろよ、やめてくれええええ！！！！」

足蹴りとボール扱いにされて投げられる、それにこれでもかといわんばかりの暴力。

え？どんな暴力かって？

それを知りたいなら、相当物好きだ。

いちおう書く。アップercutに、蹴り各種。それにパンチ各種に拳法いろいろ。

これだけ攻撃されたら、平気な奴なんていない・・・よな。

俺は、こんな毎日ををにげだしたくなつた。

しかし、菜摘の一言でいつも逃げ出すことができない。

「圭太、自分を変えたくないの？変えたかったら耐える。それだけのこと」

今思うとそれだけの言葉にはむかえなかった俺が哀しいと思う。

そして一週間が過ぎた。

「朝川さん、約束だよ。俺を変えてくれるよね？」

「ええ、いいわ。」

「あいつは、約束どおりに俺のイジメ疑惑を撤去して、菜摘と同じような人気者にした。

しかし。」

「そこで悲劇は起きたんだ・・・」



ラウンド10・闇と子羊・前編（後書き）

六日間放置してまことに申し訳ございません！……！

これからは作者が尊敬する先生のようにがんばって書きますので、  
よろしく願いします！！

ちなみに、菜摘は黒いです。腹黒です。

## ラウンド11・闇と子羊・後編

こんにちは、飛鳥です。

今回も、圭太の話を聞いてます。

「菜摘は俺を人気者にしてくれた。そこまでは良かった。が」

「が？」

「俺は、あることを知ったんだ。」

「おい菜摘、どうしたんだよ？こんなところに呼び出して」

「あなたにあたしの秘密、教えてあげてもいいかなーって思ってたさ」

「秘密？」

「ええ、あたしの、誰にも話したことのない秘密」

「そういうと、菜摘は話し始めた。」

「ナニを？」

「自分の秘密」

「はあ」

「実は、あいつ　朝川菜摘は」

そこでいったん切ると、圭太はしつかりといった。

「二人いる」

「……二人！？二人ってどういうことだよ菜摘！？」

「言葉通りよ、私とまったく同じの朝川菜摘は二人いるの」

「……双子ってコトか？」

「ううん」

「じゃ、姉妹？」

「そゆこと」

「何で姉妹が二人そろって同じ名前なんだ？」

「それは  
」

「なんでも、菜摘のお母さんは百発百中の占い師なんだと。それで  
ある時、自分を占ってみた。そしたら」

「そしたら？」

「『生まれてきた子が女の子ならば、菜摘と名づけてはいけない』  
というお告げが出た。

その人は他人に対しては占いを押し付けるが、自分は迷信だと思っ  
てたらしく、そのお告げを無視した。で、先に生まれてきた女の子  
に『菜摘』という名前をつけた」

「ほう」

「そしたら、次に生まれた子も女の子で、菜摘のお母さんは名前を  
つけるのに困ったそうだ」

「圭太、何で？だって、女の子の名前はいっぱいあんじゃない。『麻  
実』とか『敦子』とかマジでいろいろ」

「それはな、生まれた赤ちゃんの詳細が、パーソナルデータ菜摘とほぼ全部同じだっ  
たんだ。」

・・・へ？

どーゆうこと？

リカイデキナイ。

「身長も、体重も、生年月日も、髪の色も、性格も、顔も。ほとんどが同じ。ただ違うのは、『ほくら』だ」

ほ・く・ろ？

リカイフノー。

「右ほほにほくらがあることしか違いがなかったらしいんだ。そこでもう一回、自分を占った。そしたら、『その子には菜摘なつむとなまえをつける、そして、二人の姉妹をある団体に預けること』と出たそうなんだ。そこでその子に菜摘という名前をつけたと」

占いに頼りすぎですよおかーさん。

「で、朝川菜摘なつむ、朝川菜摘なつむができたと。」

「一言言おう。朝川家すげー」

「俺もそう思う」

「後さ、『ある団体』って、なんのこと？」

「俺も詳しくは知らないが、『闇と子羊』という団体だそうだ」

「なんか不気味な名前」

「俺もそう思う」

「ふうん、で君は……右ほほにほくろがないから菜摘なつみだね」

「ザンネーン、私は菜摘なつむだよーん」

「ほくろないけど」

「うん、小学生になる前にほくろの吸引した。だから今ないの」

小学生で吸引ってすげーなオイ。

「じゃ、後は姉さんよろしく」

「りょーかい」

「で、お前が菜摘か」

「そゆこと。さて、消えてもらいますか」

「は？」

「あたしたちの秘密をしつちやったからね、だから私たちの前から消えてもらうよ？ね、菜摘<sup>なてき</sup>」

「OK、姉さん」

「お、おい、お前が自分から話したんじゃないか、そもそも俺まだ死にたくない」

「「はっしゃー！！」」

そういうと二人は俺を押した。

ちなみに今俺がいるところは屋上、そして後ろは俺の身長半分ぐらいしかない柵。

こんなところで強く押されたら、俺は後ろによろめき、そのまま柵を越えてマッサカサマ

！？

「ぎゃあああああああ！！！！！！！！！！」

俺は落ちていく。はるか下にある、固い地面へと。

あ、俺死ぬのか                      と思った瞬間！！

「・・・！？」

俺、死んでない。むしろ柔らかいものの上にいる。

「「うっ、どこだあ？！」」

「マ、マツトの上です………!」

不思議なことに、柔らかいもの マツトのしたから声がする。

「怪我はありませんか？中原さん」

「君は？」

「朝川夏樹                    なつみとなてきの従姉妹です」

「従姉妹!？」

「従姉妹って………どんだけいるんだ朝川家」

「で、俺はその従姉妹の夏樹に一目ぼれした。それで、数カ月後に、告白したんだ。」

「それで？」

「あっさりふられた」

「無念。切腹しなかったのが幸いだね」

「で、落ち込んでもここに、また菜摘が来た」

「圭太、夏樹に告ったんだって？」

「ああ、でもふられた……ってここになんで菜摘がいる!？」

「なんとなく。じゃあ、夏樹と両思いにしてあげよっか？」

「できんのか？」

「ええ」

「そして菜摘は俺に催眠術をかけた。

気がついた時には、俺はあいっ  
いたんだ。」

菜摘のことを好きになって

「じゃあ、強引に!？」

「そういうことだな。だがしかし」

「まだあんの」

「ああ、この話には続きがある」

「中原さん、あなたは菜摘に催眠術をかけられています！目を覚ましてください！」

「催眠術……？」

「ええ、菜摘は何かを企んでいます。すぐにこの地から離れてください」  
群馬

「俺は、菜摘の思い通りに動かされてたのか」

「ええ、だからすぐに　！さもないと、人の心をもてあそぶあの子に、あなたは間違いなく殺されます」

「人の心をもてあそぶ……夏樹、どういことなんだ？！俺にはワケがわからん話だが！？」

「やはり知らないのですね。ではすべて話します。菜摘と菜摘は……」

「夏樹、無駄なことをはなされては困るわね？いくら従姉妹といえども」

「菜摘！？」

「あたしもいるわよ！！」

「菜摘も……二人とも何する気よ！？」

「「決まってるでしょ！必要なことを話そうとした夏樹と、さつき消すことができなかった圭太を、消すためよ」」

「あんたたち、もうそんなことやめなさい！！中原さんだって、何もしていないじゃない！」

「だって、知っちゃったじゃない。闇と子羊の存在をさ。だから、消す」

「闇と子羊……あんなとこ、ろくなところじゃないわ！だから、早く前みたいな素直な二人に戻ってよ！！」

「入ったからには抜けらんないの。さて、言いたいことは全部言ったかしら？」

「そろそろ時間ね」

「時間！？まさか、あなたたち！！」

「じゃーね、圭太、夏樹。知っちゃった君たちが悪いのよ」

「消えて？」

なつみとなつむがそういった瞬間、俺たちの周りを光が包んだ。

俺はそのまま気を失った……………。

「というわけなんだ」

「結局朝川さんって何者？それが分からないうちは敵ね」

「俺もわからん」

いや、あたしはそんなことされても生きてる圭太オマエのほう分からないけど。

そう思う飛鳥なのです。

ラウンド11・闇と子羊・後編（後書き）

次回はおまけ編です。

## ラウンド11、5おまけ

こんにちは！！作者です。

前に2、5おまけの時に募集したものを発表したいと思います！！

「なんかわくわくするね、圭太！」

「俺も俺も！」

「でもさ、こんな書き始めて半年もたたない未熟小説に、応募来たのかね？」

うつさい飛鳥。作者だつてきてほしかったんだよ。

「え、ということはもしかして……」

はい、応募、来ていません。

「「なんだつてええええええええええ！！」」

マジです。ラウンド5の時点で、一通もきてませんからね。



「作者、すげえ。鬼だ。悪魔だ。破壊者だ。」

圭太にもやろうかなーそんなことばっかり言ってる。

「ごめんなさいごめんなさいほんとにごめんなさい心から反省しますだからやめてえ！！！」

よし、いーだろー。

「作者がこんな性格してるからあたしたちもこういう性格なんだよきつと。」

飛鳥、それはいい意味？悪い意味？

「おっと、作者を怒らしたらあたしたち小説から消えちゃう！怒らせないよーにしなきゃ」

気・こ・え・て・ま・し・た・よ・す・べ・て・ねええええええええええええ！？

「にげろっおおおおおおお！！！！！！！！！！」

はい、飛鳥たちは次回も出ることができるでしょうか？乞うご期待！（いろんな意味で）！

それはさておき。

はい、作者からのお知らせ！！

何も応募が来ていない以上、おまけはできません。なので、一通でも応募が来るまで、おまけ掲載は控えたいと思います。

そして、応募を、次におまけを掲載する時までに伸ばします！

皆さん！本気で奮って応募してください！！

作者が泣きます。

## ラウンド11、5おまけ（後書き）

次からは新展開!!

圭太は実は・・・!?

次からシリーズものになっていくんでよろしくですー

## ラウンド12・そしてキミは疑い始める

ども、飛鳥です。

今は、自分の部屋にいます。健兄さんが「晩ご飯まだだから二階にいろー」っていったので。

で、やることも無い私は、とりあえず今日聞いた朝川さんと圭太の話を整理してみたいと思います。

「まず気になるのは、『闇と子羊』だなあ。闇と子羊って何だろー？」

もしかしたら健にいさんが知ってるかということ、私は階下にいるお兄ちゃんに向かって声を張り上げました。

「健にいさん」

「何だー妹」

「闇と子羊って団体知ってるー？」

「知ってるぞー」

「うそん」

「ほんとだじょー」

「じゃーどんな団体ー？」

「詳しくはテレビを見るー。ハチャンネルでいまやってるー」

「りよりよー。」

あたしは自分の部屋にある昔風の小さいテレビのスイッチをつける  
と、ハチャンネル        フ    テレビをつけた。

確かに闇と子羊の特集が。ってどんだけ世界的なんだその団体。

『えー闇と子羊という団体は、子供を引き取って育てる、孤児院的な活動が有名ですが、実はそれだけではなく、『裏』の活動をして  
いた疑いがあることが、今月十三日分かりました』

ちなみに、今日は十月十八日の土曜日。十三日って言うと五日前。  
五日前は月曜日。だから、今週の月曜日に発覚したんだ。

『その『裏』の活動についてですが、闇と子羊という団体は、引き取った子供に暗示をかけて、世界征服の仲間によつとしていた可能性が  
あります』

ほわっつ？

せ・か・い・せ・い・ふ・く？

どんだけアタマがぶっ飛びすぎてるんだその団体は。

『さらに、その仲間にした子供たちを各地に送り込み、世界各国で大暴れさせているという情報も入っています』

大暴れ……ああ、一菜摘＆菜摘（なつみ＆なつむ）みたいなことね。

『なお、その団体のリーダー、なかはらたつろう中原竜郎はその事実を否定しています』

中原竜郎……どっかで聞いたことがある。

なんだっけ？

『次のニュースです。先ほどお伝えした、『闇と子羊』に所属して

いる中原合歓（女性）が、何者かに誘拐されました。その現場を目撃していた義理の弟で、同団体所属の中原圭太は

しかもいつの間にか特集終わってるし

ん？

中原圭太？

その言葉が聞こえた瞬間、思わず自分の耳を疑った。

なんで圭太が、『闇と子羊』に？

さっきの話だと、圭太はそこには入らなかったはず。

どうして、圭太が………？

「あすかー」

「むづ。なんじゃい兄<sup>にい</sup>ちゃん」

「兄やんじゃねえーきちんと名前つける名前」

「じゃー健兄さん何の御用でーすーかー？」

「ご飯できたから朱里ちゃん呼んでー」

「了解ー」

あたしは自分の部屋の窓を開ける。と、そこにはベランダとちょっと奥にもうひとつ窓が。

お隣で暮らす一人暮らしの中学生、まいたあかり舞田朱里さんの家の窓である。

中学生だからアルバイトができずに、うちでご飯を恵んでいる。

けっこう気さくな人で、さっぱりしている性格。一応、彼氏はいない。

あたしは、「朱里姉さん」って呼んでるからあっちも、「飛鳥」って呼びすてしてる。

でも、今は中学三年生。来年、いや、さ来年になったら、うちに来ることなくなるかもしれない。

とりあえず、いつものようにその窓に向かって叫ぶ。

「ご飯を食いたいやつはいねえがー！今ならもれなく飛鳥サマのうちで美味しいものがー」

「ここにいますよ飛鳥なま げサマー!!」

こんな声がして向かいの窓が開く。そこには、朱里姉さんそのひとが。

「誰がなま げじゃい」

「まーまー怒らずに。さて、お邪魔しマース」

そういうと、朱里姉さんはさっさとうちのベランダへ。

うちのベランダと朱里姉さんちの窓は、ほぼ十センチしかすき間がない。

加えて、朱里姉さんはけっこう運動神経がいい。

だから、軽々とこっちにこられるのである。

「ふふふ、今日のご飯はなんじゃらほい」

「楽しみだねー朱里姉さん?」

「うん!!」

「あー食った食った」

「おなかいっぱいだねー」

「うん、これで安心して家に帰れるわ。じゃーねー飛鳥」

「じゃーね。朱里姉さん、また明日ね」

朱里姉さんはまたうちのベランダを通ってうちに帰ったとさ。

「さて、と」

さっき、考えてたこと。

どうして、圭太が？

あたしは壁にもたれかかった。すると。

「ドサッ！ー！！」

「うきゃあー！！」

あたしの足元に本が落ちてきた。

どうやらもたれかかったのは壁ではなく本棚だったらしい。

「いったあ……あれ、なにこれ。『飛鳥のアルバム』……  
あ、これ、健兄さんが撮った小さい時の写真!!」

どうやら落ちてきた本　　アルバムは、小さい時に健兄さんが撮  
ってくれた写真アルバムらしい。

「あ、これ、二年の時に健兄さんとあたしと圭太と圭太の父さんで  
撮った写真……ってええ!？」

なんと、圭太のお父さんの顔は、あの闇と子羊のリーダー、中原竜  
郎の顔と同じだったのだ。

圭太のお父さんが闇と子羊のリーダー、闇と子羊所属の女  
性が誘拐されたこと、そして圭太自身も、闇と子羊に入っている

↓

圭太、まだ何か隠してるね　　？

あたしが「圭太がかくしていること」を知るのは、もう少し先のこ  
と。

## ラウンド12・そしてキミは疑い始める（後書き）

はい、新キャラ続々登場です。

飛鳥のお兄さん、お隣さんの中学生、圭太のお父さん、そして圭太の義理の姉、合歡さん。

あ、朱里さんの話はまた今度、します。

ラウンド13・闘い〜圭太と過ごすのは私だ!〜前編

ども、飛鳥です。

突然ですが問題です。

今、何をしてるでしょう？

正解は……

「はい、今から三十秒で入りたい委員会を決めてくださいー!」

「「「三十秒で決まるわけナイでしょう「「「

「じゃ一分？」

「「「せめて三分くれ「「「

「了解しました、じゃ、今から三分したら決めますよーいいですねー!」

「はーい」

分かりました……よね？

はい、今は委員会を決めています。ちなみに今は二期です。

季節外れだと思った人、手を上げるー！……いち、にー、さん、しー、ご。

……ご？

意外に少ない！だって、委員会とか係って、フツ、一学期に決めるもんでしょ！？

え？フツって何を基準かって？作者の現状だ文句あつかコノヤロウ。

……つと。

話を戻そー。

私たちが通っている赤城市立たつみ巽小学校では、委員会は五年生から。

そして、新五年生は一学期に委員会見学を二、三回してから、二学期に委員会を決めるという、とてもややこしすぎる仕組みになっている。

そして、今日は委員会決定＆委員会初日なのだ！

しかも、今学期議長があたしだから、どんなことでも偽装できるというわけなのじゃー！！

これで圭太とあたしをくつつけて、圭太と朝川さんを離さねばー！！

ちなみに、委員会決めのまえに、「圭太、委員会どこはいる？」って聞いたから、作戦成功間違いなし！

「では 三分とつくにたったから、決めます。はじめに、一号車が黒板に名前マグネットはって下さい」

ここからちょっと説明が入ります。説明きいといったほうがこれからの本文が分かりやすいよ？

号車 二つの班からできている列。図は下に。

二号車

一号車。

この号車 二号車の のところに座っているのは朝川さん、一号車のは川島さん。はゆずぼん。そして はあたしと圭太なのじゃー！

「次、二号車がはってください、その後三、四号車」

ちなみにうちのクラスは、この号車が四つある。つまり班は八つってこと。

あと、各委員会も説明しとかなきゃわかんないよね。

わが巽小の委員会は十二ある。

#### 1、児童会。

各クラス一名。主な活動は音楽集会、部活の壮行会の司会、募金活動を促す活動、毎月発行する児童会通信を書くことかな。

#### 2、音楽委員会。

音楽集会の指揮や伴奏、毎週月曜日の『コーラスデー』の時に各クラスを回って歌を教えることが主な活動。これは各クラス三名。

#### 3、体育・運動委員会。

休み時間に一輪車や竹馬の貸し出しをしたり、運動会を取り締まったりする。あとは、外で遊ぶのを促せる運動をするみたい。だいたい各クラス二〜三名。

#### 4、放送委員会。

休み時間・給食の時に校内放送をする。あと、集会の時の音量調整をするのが役割の委員会。各クラス二人。

#### 5、動物飼育・愛護委員会。

これは、学校で飼ってるウサギ『ナミ』『アキ』や文鳥・『あけぼの』、モルモットの『モルモーちゃん』をしっかり育てるのが役目。各クラスだいたい三人。

#### 6、生活・安全委員会。

廊下を走る生徒や、名札をつけていない生徒を注意する委員会。もちろん、その他のこともやるらしい。各クラス一名。

#### 7、美化・リサイクル委員会。

この委員会が最も大変かもしれない。美化としての活動は、まず週一のワックス配り、放課後の簡単掃除。掃除用具の整頓などなど。

リサイクルは、アルミ缶やプルタブを集めて寄付するのが役目。各クラス三名。

#### 8、保健委員会。

文字通り保健実の掃除や、ベッドの整頓、さらに放課後の歯ブラシケース（歯ブラシが入っているケース）を消毒する。各クラス二名。

#### 9、広報委員会。

毎月発行する新聞を製作する。低学年用『キラキラ輝け！』と高学

年用『虹の架け橋』、全学年用『JUMP!!』や特大新聞『キヤンバス』の四種類がある。あと、体育館の壁の飾りつけもある。各クラス二名。

10、図書委員会。

図書室の本を貸し出したり、低学年に読み聞かせなどを行っている。各クラス二名。

とまあ、こんなところかな。で、あたしが入りたいのは、広報委員会  
!!

これなら外に行きたくない時の言い訳にもなるし、何より新聞がたのしそー!!

「一号車、はり終えましたか？」

「いちおー」

「あつそ。じゃ、二号車はつてつてー」

とまあ、適当にやって、全員張り終えたわけでした。

あたしはその中に、予想外のやつを発見したわけで。

「・・・あれ？」

あたしの目線の先には、『中原』ととっても丁寧に書かれたマグネツトがあるわけでして。

いや、あたしの目線の先はそこじゃない。その少し横の、希望する委員会の委員会名。

それは

「どづぶつ、あいごいいんかい？」

圭太が一番希望してほしくなかった、委員会名だった。

ラウンド13・闘いゝ圭太と過ごすのは私だ！ゝ前編（後書き）

やっぱり続きます。

ちなみに、闇と子羊に迫る前に、どうしてもやっておきたい話なので、途中でも入れました。

ラウンド14・闘い〜圭太と過ごすのは私だ!??後編(かも)

「どうぶつ、あいごいいんかい？」

こんにちは、飛鳥です。

今、委員会決めているんですが、ハプニング発生！

圭太があたしが聞いた時とは違う委員会を選んでしまったのですよ！

どーしよ      !!!!!

）    +    +    ）

それは、一番人気&あたしが一番いてほしくなかった『人』が約二名いる、まさかのまさかの動物飼育・愛護委員会だった。

トーゼン、あたしがそれを許すはずも無く

「中原圭太、議長権限により、動物飼育・愛護委員会は許しま

」 「す!!--!」

「はあ!?!」

いきなり割り込んできたその人は、圭太と同じ委員会に一番立候補してほしくなかった『約一名』。誰か、分かりますよね？

「議長だからってその権限は許しません!!だいたい、希望する委員会を空きがあるのに拒否するなんて、おかしいです」

「朝川菜摘だまらっしやい!!」

「・・・けっ」

その一番いてほしくない約一名が黙ったと同時に、今度は圭太が騒ぎ始めた。

「おい日高、俺を動物愛護を希望することを許さないって、どういうことか説明しやがれ」

だってトーゼンじゃん。『動物飼育・愛護委員会』の希望のところに、『川島赤那』『朝川菜摘』っていう人たちの名前びょうげんきんマグネットがそろってはってあるんだもん。  
こりや日高飛鳥けいたたいすきにんげんとしては阻止するしかないでしょ。

「うーん、約束を破った人には罰を!!ってとこかな」

「日高、それってもしかして俺が広報選ばなかったことか?」

「ひひひ」

「怪しい笑いすんな!!この小悪魔こあくま!!どこ選えばうと俺の勝手だろ!許可しろ!」

そろそろ本気で怒ってきた圭太をなだめようと、あたしはあることを言った。

「ねえ、圭太。どうせ委員会決めてじゃんけんっしょ?」

「・・・たあぶうんなあ!？」

「じゃあ、そのじゃんけんで一回でも勝ったら、許可するよ」

「ほんとなあ!！」

わお、さっきまでいじけてた圭太が一瞬でよみがえった。

「ただし、負けたら広報決定ね」

「よっしゃ!！」

こんな不利っぽい賭けをしたのは理由がある。

こいつは昔から、じゃんけんには負け続けている。だからだ。

たぶん今回も負け

「勝ったぞおお!!!！」

てない!?!やばっ!!

「負けたあつ!!中原君ってじゃんけん強かったっけ!?(ぷぷぷ)

」

「そうよ!!圭太強すぎっ!!(あははははは)」

「「飼育委員会希望の人全員打ち負かすなんて、強すぎるよ!!!」  
ぷ、あはははははは!!!」」



「はあーい（このやるー。お前を巻き込みたくないからせめて委員会だけでも離れようとしてやってんのによー！！）。」

「なんか、いったあ？」

「いえ、なにもお。」

「よし、中原圭太は広報委員会決定でーす」

と、委員会騒ぎは終了したとき。飛鳥だけ、めでたしめでたし。

「ちょっと、作者！！何その終わりかたは！！」

てへ。

「てへじゃない！！！！」

ちゃんちゃん。

「ちゃんちゃんでもないけど……。おしまい。」

ラウンド14・闘いゝ圭太と過ごすのは私だ!??後編(かも)(後書き)

続く……かもしれない。

本文の圭太の弦きが、次につながったり……しちゃうかもしれません。

## ラウンド15・圭太の眩きの裏側&闇と子羊の実態

失敗した。

あの時日高を信じて、すべて打ち明けていれば。

こんなことには、ならなかったかも知れないのに。

もう、遅いが。

俺は中原圭太。小五の男子だ。

俺は今、後悔している。

あの時に、日高を信じて、何もかも打ち明けていれば。

そして、あのときちゃんと忠告していれば。

これから、あいつを危険な目に合わすことも、なかったのにな・・・。

俺の本名は、岩本圭太だ。しかし、一年のころに苗字が変わった。  
なぜなら。

俺は両親を、幼くして亡くしたのだから。

俺の父さん            岩本厚樹は、俺が小さいころに死んだ。病死だそうだ。

残されたのは俺と母さん。母さんは、女手一つで俺を育て上げてくれた。母さんのおかげで、今の俺がいる。

しかし。

その母さんも、俺が一年のころに、交通事故で亡くなった。

そして俺は、養子として親戚に引き取られた。

そして引き取られた先が、今の俺の家            中原家だった。

中原家には、亭主の岩本厚樹<sup>いわもとあつき</sup>、その妻の中原慶子<sup>なかはらけいこ</sup>、実の娘の中原合<sup>なかはらあひ</sup>、  
悦<sup>ねむ</sup>がいた。

俺はその、義弟として幼稚園年少のころ引き取られたのだ。

引き取られた当初は、みんなとても優しく接してくれた。それはもう、妖しいほどに。

そして数ヶ月経ったある日。俺の人生を狂わせる、運命の日がやってくる。

）  
）

『圭太くん、やっと見つけた』

『あ、合歓姉さん。なあに？』

『圭太くん、お姉さんのお願い、聞いてくれる？』

『お願い？』

『そう、お願い。聞いてくれるかな？』

『うん。いいよ』

『お姉さんね、苛められてるの』

『え！？』

『だから、強くなれるところに通ってるんだ。』

『へえ。僕も強くなりたいなあ』

『それなら、圭太くんも一緒に通ってくれるかな？』

『うん！いいよ！』

『じゃ、今日の夜、お姉さんと一緒に行こうね』

『分かった！』

）  
）

この会話が交わされたその夜、俺は闇と子羊本部に連れて行かれ、その場で入会手続きをしてみた。

その時は、姉さんの言葉を信じきっていたからだ。

しかし、今思うと姉さんの言葉は嘘じゃなかったようにも思う。

そこに入った俺は、その言葉通りに強くなれたのだから。

）  
）

少し話はそれるが、闇と子羊には、『部署』というものが存在する。

部署は三つあり、それぞれがまったく違う役割をしている。

一つ目は『収集部署』。その名のとおり、情報を収集する役割だ。

二つ目は『特殊能力部署』。これは人工的に開発された特殊能力を一人ひとりに覚えさせて、ある目標のために備える部署だ。

最後は『裏部署』。これは普段何の役割もしないが、すごく力がある人が優先的に配置される部署だ。

そして俺は、姉さんが所属し、『強くなれる』という、“特殊能力部署”をえらんだ。そこには、菜摘なつみとなつむと菜摘がいた。

そして俺は、その事 闇と子羊のことはまったく知らずに、“強くなれるところ”として小学校入学式を迎えた。

入学した俺は、夏樹にすべてを教えられる。

夏樹も、闇と子羊に所属する一人で、『裏部署』に所属していた。だから、すべてが分かるのだ。

しかし、夏樹は俺に秘密を教えているところを菜摘たちに見つかり、攻撃を受けてしまう。

そして今。夏樹はまだ、攻撃のときつけた傷が治らず、入院している。

そして俺は、自分のせいだとショックを受ける。そのショックで俺は、“好き”という感情が分からなくなってしまったのだ。

）  
）

このことを俺は日高に教えたほうがいいのか？

いや、教えないほうがいいだろう。

あいつを危険な目に合わせたくはないから。

そのつもりで委員会も離れようとしたのに……。

ほんとは俺も、あいつと同じ委員会に入りたい。

でもあいつを危険な目に合わせたくはないという気持ちもある。

だが、あいつを守れば菜摘に俺はまた、”あの時”のようにされるかもしれない。

夏樹をとれば俺は傷つかずにすむ。しかし、あいつはショックを受けるだろう

菜摘を守れば菜摘の思うつぼだ。あいつは守らない。けど

自分をとればあいつが消えるかもしれない。

!!

あいつを守れば、俺はまた、あの時のように菜摘に

俺は、どうすればいい？

菜摘と夏樹と俺とあいつ、誰が大切なんだ？

そう考えれば、分かるはずなのに。

何も分からずに、今日も夜はふけていく。

## ラウンド15・圭太の弦きの裏側&闇と子羊の実態（後書き）

なんか自分でも書いててわけわかんなくなりましたあ（笑）

まあ、次からはまたハチャメチャになりそうですので、ご期待ください！？

## ラウンド16・息はピッタリ！？

「溶けます溶けます、雪のように」

ども、飛鳥です。

この「雪みたいに溶けちゃうぞ」「発言をしているのは、ご存知バカアホマヌケ三拍子揃っちゃった人＆わが広報委員会同僚（って言う表現でいいのか？）、圭太でつす。

「溶ける溶ける 溶けたらあたしがかき氷にして食ってやるから安心してとけるお」

「・・・・・・・・なんか溶けるの嫌になってきたな」

とまあ、今日もたわいもない会話をしております。

「あすきちゃん、中原くんをかき氷にするよりも、アイスクリームにして食べたほうが美味しそうだよ？」

「なんですかそのグロテスクな発言は。ってかゆずぽんなぜここに！！」

「カキ氷のほうがグロテスクだと思うよ、あすきちゃん」

「そうかな、あたし的にはアイスクリームのほうが……って！  
今は委員会活動時間だよ！？君児童会でしょーが！！」

言い忘れてたけど、今日は委員会活動初日。委員会決めた日は、昨日だけだね。何でも先生たちの都合らしい。

「んー、あたし係決まっちゃったから、こっそりと抜けてきたんだよ、あすきちゃん」

「ふーん、こっそりとねえ」

### キンコーンカーンコーン

「「あ、校内放送」」

『五年三組の児童会役員、及び今年度児童会長の高島柚菜さんは、至急児童会室に』

「ぜんぜんこっそりしてないしっ！しかももうゆずぼんないし

っ！！てか五年で児童会長って何さ！！」

「うるせえよ、あすきちゃん」

「そしてなぜに圭太までもがあたしのことを『あすきちゃん』なんて可愛く呼ぶのかなあ！？お仕置きっ！！」

ドンガラガッシャーン！

「やめろおひだかあ」

ドンガラガッシャーンテイク2！！&むむむむむう攻撃！！

「むむむむむう攻撃って何だし……がく」

圭太は一時的に死んでしまった。

「あんたが生み出した技でしょ」

ピンポンパンポーン

「また校内放送？」

『五年三組の広報委員、日高飛鳥さんと中原圭太くん』

「はい」

『日本中から苦情が来ています。永遠に黙りなさい』

「無理だつて！！しかも日本中から苦情つてつて何さ！！」

『知りません。とにかく今日が貴方たちの最期ですので棺桶に入るまで黙りなさい』

「今日！？あたしら今日死ぬの！？」

『そういうことになりますね あすきゃん』

「可愛く言っなっ！！」

『・・・ちえ』

「ちえってなにさ！！」

『チラリラリーン、ラリラリーン』

「あの放送委員、下校の音楽にしゃがった」

「くら日高さん！黙ってください」

「・・・はあい」

委員長に言われたら仕方ないということで、あたしはとりあえず黙った。

「これで委員会活動を終わりにします。礼」

「「「「ありがとうございます」」」」

「つてもう終わりなの！？何もやってないよあたしら！？」

『今日の巽小校内放送担当は、五年、川島と』

『朝川でお送りしました』

「やっぱりあいつかよ！！」

## ラウンド16・恵はピッタリ!?(後書き)

はあ・・・書いててこっちが疲れました(笑)  
もしかしたら変かも!?

そういうことは言うてくださいね。お願いします。

ラウンド17・イツア・リンカーン！――準備編・係決め――

「来月は林間だ！！」

どーも、飛鳥です。

今は朝の会なので、先生の話聞いてます。え？似合わないって？  
あたしはこれでも結構まじめな性格なんだよ！！文句あつか？

「日高、文句はないがうるさいぞー」

「すみません先生、でもこれは社会問題ですので」

「社会問題か。それならば仕方ない」

って、納得しちゃうの！？ねえ、先生！？

「しちやいます」

うそん。しちやうんだ！？

「せんせー、早く話してくださいよー！――時間目特別授業ですよー」

「おーわかってら、ちよつと日高で遊んでからな」

遊ばれてんですかあたしは。

くく

「えー、来月は、3泊4日の林間学園兼、校外学習があります。」

あ、そうだっけ？林間かー、確か女子男子別室なんだよねー。

当たり前だけどさー。

「林間の部屋割りには、普通女子男子分かれてるんだけど、今回だけ男子が足りないということで、女子が一人だけ男子と同室になるぞー」

おお、いきなりタメ口に。って、女子が一人だけ男子と同室って！！

逆ハーレムだね。

「部屋は出席番号で、各クラス四部屋だから、女子男子に二部屋ずつだー」

ふーん。じゃあ、男子の最後が圭太だから、次の女子が同室なのね。・・・ちよつと待て。

ちよつと出席番号を整理しよう。

うちのクラスは36人学級。男子の最後117番は圭太（誕生日が三月二十六日）

女子の最初「1番はあたし。（四月五日生まれ）・・・あたし！？」

ということは、男子と同室って・・・あたし！？」

「そー言うことだ日高ー。がんばって男子をウハウハにしちまいな」

「お待ちになって先生！！あなた私の思考読んでました！？そしてウハウハッて何ゆえにそんなことをおっしゃっているの？！ですぞうか！？」

「それはともかく。あとは係決めれば今日の林間関係は終わりだ」

係かー。あたしは無難に食事係にでもしようかなー？

「係だがー、日高は強制的にキャンプファイヤー係だー」

ふーんそうなんだー。あたし強制的にキャンプファイヤー・・・  
つておい！！

「お待ちになって先生テイク2！！あたしに選択権は！？」

「無いだろーなー。みんなは日高に選択権やりたいかー？」

「「「「「無いですよねー」「」「」「」」」」

集団いじめ？

「お前はいつつもさわがしーからなー、盛り上げる役にぴったりだ

「！！！」

うーん、そういわれちゃうとなー。

「まあ後で中原もキャンプに入れて、もっと騒がしくさせるがなー」

「なんか言いましたせんせー？」

「なにも」

なんかいつてただけだなー。ま、いいか。無視無視。

「じゃあ係決めるぞー。実行委員がいいやつは手をあげろー」

「はーい」

・・・そんなこんなで係は決まった。全員の結果は載せられないんで、代表的な人だけね。

ゆずぽん・・・実行委員

川島さん・・・風呂・保健係（宿泊施設の風呂掃除や、みんなの健康チェック）

朝川さん・・・食事係

圭太・・・キャンプファイヤー！

結局、圭太とは部屋だけじゃなく、係も同じになりましたとき。  
ト  
ホホ。

・・・でも、ちゃんす？

ラウンド17・イツア・リンカーン！〜準備編・係決め〜（後書き）

ちなみにサブタイトルの「リンカーン」は、どこぞの有名な人じゃありません。

林間<sup>りんかん</sup>を改造しただけです！！  
やっぱり続く……かも。

ラウンド18・イツァ・リンカーン！――準備編その2・委員長つすか！――

「これから！キャンプファイヤー係の集まりをはじめますっ！――」

ども、飛鳥でっす。

今日はキャンプファイヤーの集まりがあるらしいので、集まりがある体育館に来てみました。

そしたら。

なんかすっごく緊張しているっぽい女の子が一人と、男の子が数人しかいないのです。

これはどうした事でしょうか？

そしてここは本当に集まりの場なのでしょうか？

確認するべく、その女の子の元へ――！

「すみません」

「あゝい！？なんでございましょうか？」

そんなに驚かなくなつて。

「ここってキャンプファイヤー係の集まり場で良いんでしょうか――？」

「はいよろしいのでございますよ！？私はいたって健康体でふ！？」

そんなこと誰も聞いてないってば。ってか舌かんだね、今。

「そうじゃなくてー、ここはキャンプファイヤーが集まる場で良いんですかー？」

「はいそうでございますですよ！この人数で、しかもふつつかものですがよろしくお願いしますっ！！」

いやそんなこと聞いてないって。しかもふつつかものってなにさ。結婚式じゃないんだから。

「だーかーらー！！」

「えーっと、どちら様で？」

この人頭大丈夫か？

「あなた、あたしの話聞いてましたかー？」

「私の脳様は生死の間をさまよっておいででふ……はっ！！」

おいおい、脳に様つけてどうすんの。あなたの脳はお偉いさんですか。

すると、今まで結構狂いまくってた女の子が落ち着いたらしい。あたしのほうを向いていった。

「取り乱して申し訳ありませんでした。私は五年二組学級委員長のさわもとおゆむ澤本歩夢と申します。キャンプファイヤー係副委員長を任されております。以後よろしくお願いいたします」

そう言っぺこっとお辞儀をした。わお、礼儀ただしー。

「あたしは五年三組の日高飛鳥。よろしく。えっと、副委員長さんだよ、澤本さんは」

「ええ、そうです。あと、澤本さんと呼ぶのは、やめて頂きたいのですが」

「へ？どして？」

「えっとですね・・・私クラスで『委員長』と呼ばれておりますので、名字で呼ばれるのは慣れていないんですよ・・・だから、クラスの方達と同じように、『委員長』と呼んでもらえるとありがたいですよ」

「ふーん、そうなんだ。じゃ遠慮なく呼ばせてもらうね、委員長」

「はい、ありがとうございます。えと・・・日高さん」

あたしの名前を覚えてるよね？その様子だと覚えてないっぽいけど

さ？

「それはそーと、委員長って誰なんだろうー」

「私は五年二組の委員長ですが？」

いや、そうじゃないっ！！

「キャンプファイヤーの委員長だよ。委員長は副委員長でしょ？」

「・・・なんだか分かりにくいですねー」

「同感」

あ、また話がそれた。

「委員長知ってるー？キャンプファイヤーの委員長。ってかいつの間に副委員長とか決まってたのー？」

「えつとですね、私も詳しくは知らないのです」

へ?????

「あれは五分ほど前のこと。私は体育館にやってきました」

わお、なんか語りだした。

「そしてステージのほうを見ると、白い垂れ幕と黒い垂れ幕がありました。そこには、こうかかれておりました」

なになに？

「白い垂れ幕には『澤本歩夢は副委員長だ！』と、黒い垂れ幕には『日高飛鳥が委員長だ！』と書かれていたのです」

はい？

「以上です」

「終わりなのっ！？」

「そうですが」

「たったそんだけなの？あまりにも簡単かつシンプル」

あたしがそういうと、澤本さん  
委員長はにっこりと微笑み  
ながら右手を差し出した。

「というわけで、これから約一ヶ月間、よろしくお願いしますね。  
“委員長”さん」

この言葉とともに。……ってはい！？

「ちょ、ちょいまち！あたし、委員長！？」

「そうですよ、委員長さん」

「私が委員長つてどゆこと！？」

「だから、私も詳しく知らないのですよ。そこの垂れ幕にかいてあ

「ただけです。」

「そんだけ？」

「よろしくお願いします。副委員長として、委員長をサポートします」

「はい……？」

「あたし、ほんとに委員長すか？」

「あ、もうひとつだけ」

「なんですか？（副）委員長」

「五年三組中原圭太さんも、委員長なんです」

「は？」

「二人でがんばってくださいね」

「ハハハ。」

「圭太と……二人で？」

「ということは……だよ。」

「林間学園、何もナシじゃすまないよん。」

あたしらは、何か起こすよ!!

起こしてやるーじゃん!!

まってるよ、林間学園!!

ラウンド18・イツァ・リンカーン！――準備編その2・委員長つすか！――

はい、飛鳥たちは何か起こしてくれそうです。

何が起こるかは、不明。

ラウンド19・盗み聞き しちやえっ！

「なにい！？」

どーもー！

あすきさんの親友の、柚菜です。

今、あすきさんが圭太さんと話してるので、それを盗み聞きしちやいましょう

ではでは。

盗み聞き、開始っ！！

「だから、あたしと圭太がキャンプファイヤー係の委員長なんだってさ！」

「そんな馬鹿なことあるかよ！？だいたい、何で俺が！？」

「知らないよ！委員長が教えてくれたんだから！」

「委員長は俺らだぞ！？」

「五年二組の委員長さん！！キャンプファイヤーの副委員長さんだよー！！」

「訳分からん！！」

「左に同じ!!」

「……私も訳分かりません。」

仕方なく、私はたまたま近くにいた男子に命令。

「ねーそのパー君」

「はい!?!」

あ、パー君っていうのは、この男子が頭クルクルパーだから。

「あそこにいる二人（あすきさんと圭太くん）の話を盗み聞きしてきて。絶対に聞き漏らさないよーに」

「はー。柚菜サマのお言葉とあつては、逆らえませんが」

といって、パー君はたつたかとあすきさんと圭太くんの所へ。

あれ、パー君なんか困ってる。

行ってみよー。

「あ、あの一、柚菜サマからのご命令なのですが」

「邪魔。どっか消えろ」

「ははー」

なんかこんなことになってた。

おもしろいからもっといじろーっと！

「あすきやーん」

「なーにー？ゆずぼん……ぐほあ！？」

あすきやんの足に圭太くんのキックがさくれーっ！！

「いつつ……ちょっと圭太！！あたしに恨みでもあるわけ！？」

「別に無いけど」

「別に無いならやるなー！！くらえー、『ペペロンチーノを食べちゃうぞっ攻撃』と『むむむむっ攻撃』！！」

「だから『むむむむっ攻撃』って何だー！！……ぐほあ！？ぐほあ！？」

二回悲鳴（？）があがったのはもちろん、攻撃が二つだからだよ。や、でも『ペペロンチーノを食べちゃうぞっ攻撃』ってなんだろう。

「な、なんという破壊力だあ……チーン」

圭太くんは一時的に死んでしまったらしいねっ

「ふう、やっと片付いた。で、ゆずぽん話はなあに？」

「あ、そうだった。話があって……あれ？」

あれれれれれ？

「話したい内容、忘れた」

「まあ、こんだけなんかアクシデントあったら、そりゃ忘れるよね。」

うん。ありがとうあすきちゃん。

それにしても、さ。

アクシデントの原因って、私？

ラウンド19・盗み聞き しちやえっ！（後書き）

はい、初めての柚菜視点でしたっ

初めてだけに書きなれてなくて、執筆途中でわけわかんなくなりま  
したね。

読みにくかったらすんません。

ラウンド20・イツア・リンカーン！――準備編その3・放送室に駆け込む生

「これから、第一回キャンプファイヤー係の集まりを始めます」

「「「へーい」「」」

「よろしくお願い……あれ？」

はい、かたつくるしい挨拶っぽい会話で始まりました。飛鳥です。

実はちょっと、困ったことがおきたんですよ。

それは

「何でキャンプファイヤーはこんだけしかいないんだ？ねー（福）委員長知ってる？」

「えーと、副委員長ですよ私は。それがなぜに幸福の福なのでしょうか？」

「気にしない気にしない」

「………気にしてください」

そう、キャンプファイヤー係がなぜか六人しかいないのですよ！！

その六人とは、五年三組の圭太とあたし、五年二組の委員長ともう

一人の髪が長い女の子。

で、五の一&五の四が一人ずつ、っと。

「ほんとにこれだけー？」

あたしは全員を見回しながら言った。と、さっきの髪の長い女の子が控えめに手を上げた。

「あの一、たしかうちのクラス、もう一人いたんですけど……」

「そういえば、五の一も、もう一人いたよっ!!」

この元気っぱい声は五の一の女の子だ。

「そういえば、五の四もいたぞ。もう一人。」

ということは……サボりだねー。

「サボってるやつをひっぱり出しに行ってくる」

「日高、俺も行く」

いつのまにか、そういうことになったとき。

で、今あたし&圭太は、五年一組の教室のドアの前にいる。ちなみに、ここに来たのは五分ほど前。

つまり、五分間立ち尽くしてゐるってわけなのだ。

なぜって？

このクラスの先生、鬼のように怖いんだもん！！

「圭太、はいろーよ」

「じゃー、お前から入れよ」

「圭太から」

「日高から」

怖さのあまりに、こんなやり取りが続いているのですよ。まったくこれだから男子ってやつは。

『あなたが言えるせりふじゃないよ、飛鳥。そう言うなら飛鳥から入れば？』

む、作者の声だ。無視しよ。

『しくしくしく』

泣いてるんじゃないよ。みっともない。

『うっ、いつもよりも飛鳥が冷たい・・・こうなったら飛鳥と圭太を離して菜摘を圭太と・・・ぶつぶつぶっ』

あ                   ！！分かった分かったお願いだからそれだけはー！！やめてえ！

『けっ。じゃ、ここから本文に戻りまーす』

戻りまーす。

）  
）

「だーからー！圭太から！」

「日高からー！！」

「むー、ならばこれはどうだー！！」

むむむむう攻撃っ

「あががががががががが！！やめろおおおー！！」

あははっ。知ってた圭太？むむむむう攻撃ってオールマイティなんだよっ

「オールマイティって・・・チーン」

圭太はまたまた一時的に死んでしまった。

「けけけっ」

そんなこんなで廊下は騒がしやー。でもこの騒がしさのおかげで、

「ちょっとー!!廊下にいる奴うるさいよ!こっちきな!」

あの鬼のように怖い先生

ひさみきくみ  
柊久美子先生に見つかってしまった。

くく

「さて、なんで廊下で騒いでたのか説明してもらおうか?」

現在、あたしたちは柊先生に、五の一の教室に連れ込まれ、先生の机の前で尋問されてます。

柊先生が目の前の机を握りこぶしで叩くのみるだけで怖すぎます。

「え、えとお……」

「あいむそーりー」

その怖さに、あたしたちもうたじたじです。

てか圭太、『あいむそーりー』ってなにさ。

「説明しろつつつてんだろ!」

バン！！！！

先生が机を叩くたび、あたしらの体がビクツと震える。

先生……ほんとに女ですか？

「えっと、あたしは林間学園キャンプファイヤー係の委員長、日高飛鳥なんですけど」

「同じく中原圭太です」

いちおう空気も先生も静かになってきたところで、あたしはやつと口火を切った。

「五年一組のキャンプファイヤー係が、一人、集まりに出席していないようなんですよ」

「なんだってえ？」

そういつた瞬間に、柊先生の表情一変。なんか額に青筋が。怖っ！！

「で」

「ほおおそおおしいいいつううううう！！！！！！」

あたしの言葉が終わらぬうちに、柊先生はとてつもない速さで教室を出ていった。

それをあたしと圭太はぼかんと口をあけてみている。

「柊先生……どこ行くんだろ」

「きっと放送室だな」

「なぜに」

「だってさっき、『ほおおおおおそおおおおいしいいいいつ  
うううううう』って」

「納得」

ポンピンパンポン ポポポンピンパン ポンピンパンポン

「「あ、放送」」

校庭で遊びやがっている、または委員会活動で校内に居や  
がる五年一組の野郎どもに申し上げます。全員教室に戻ってこいや  
あ！！

ポンピンパンポン ポポポンピンパン ポンピンパンポン

うん、この声は間違いなくあの先生だった。

感想。

「うん、すごく迫力のある放送だった」

「上に同じ」

そして

「柊先生どうして呼んだんだろ？」

「しらねー。またお説教じゃね？」

五年一組の生徒たちが、ドカドカと戻ってきた。

一緒に柊先生も戻ってきた。

そしてお説教。

「テメーらの中で、キャンプファイヤー係はいるか？」

「逃げましたー」

「放送室、行ってくる」

またかよー！！

ピンポンパンポン（以下略）

五のーのキャンプファイヤー係、首締められるか、もしくは  
ピーされることが嫌ならば速やかに五のーの教室に來なさい

ピンポン（以下略）

「ピーって何だろうね」

「たぶん自主規制の音だ」

でもやっぱり柊先生……男じゃないの？

そしてやってきたのは頭丸刈り男子！！

「テメーがキャンプファイヤー係ってのは」

「そうです」

なんか余裕振りまいてるやつだなー。きにいらねー。

「じゃ、その委員長さん、捕獲して。」

「「は？」」

とりあえず言われるままに捕獲。

そして体育館につれてったとき。

そしてその男子。

残りのキャンプファイヤー系のメンバーに、ボコボコにされて終わりましたとさ。

ちゃんちゃん。

ラウンド20・イツァ・リンカーン！〜準備編その3・放送室に駆け込む生

はい、またまた書いててわかんなくなってきました。

しかし、キャンプファイヤーって書くのがめんどい。

なんかいい略し方ないかな〜（笑）

ラウンド21・イツア・リンカーン！――準備編その4・自己紹介だもんね――

「……では、これからほんとの意味でのキャンプファイヤー係の集まりをはじめます」

「へーい」

ども、何回目かのセリフで集会を始めた司会、飛鳥でっす。

「はい、まずは自己紹介なんですけど、委員長が言う前に  
丸刈りくん、キミからやって」

「はい！？ぼくっすかあ！？」

「だからオマエからだっつ。あと時間無いの。早く始める」

あたしの『早くやんなきゃクビ』オーラで、ようやく丸刈りくんは自己紹介を始めた。

「……僕は五年一組の大橋知樹おおはしともきです。よろしくお願い……」

「趣味・目標も語れ」

「……趣味はサッカー。目標はキャンプファイヤーを成功させることです」

「そんなありきたりの自己プロフィール紹介はいらん。次」

あたしに言われて大橋はすごすごと退散する。かわりに、同じ組の

女の子が立ち上がった。

「あたしは、大橋と同じ五年一組の藍那真希あいなまきですつ。趣味は運動。目標はキャンプファイヤーを盛り上げて、成功させることだよ。みんなで力を合わせてがんばろッ!!」

「うむ、なかなか元気な子ですね。次ッ。」

今度は、五の二の委員長と、髪の長い女の子。

「私はキャンプファイヤー副委員長の澤本歩夢です。趣味は勉強、目標は皆さんと同じでキャンプファイヤーを成功させることです。どうぞよろしく」

「・・・私は五年二組の石垣マナいしがきマナです。趣味は、えっと、ピアノ。目標はその、キャンプファイヤーを盛り上げられたら、その、いいな、って・・・」

緊張してるのかな？顔が真っ赤。それに、言葉も途切れ途切れだし。次は、もう一人の五の二男子。そういえばこいつもサボりだったんだっけ。

最初にやっときゃ良かった。

「俺は石垣亮祐いしがきりょうすけ。趣味は運動全般かな。目標は盛り上げることだよ。よろしく!!」

ん？石垣？そういえばもう一人そのような人が・・・

「ちなみに俺はマナの従兄<sup>いとこ</sup>。理由があつて同じ家に住んでる。」

なるほどね。って次あたしだ！

「あたしは五年三組の日高飛鳥。そして、今年度のキャンプファイヤー係委員長。趣味はクラスの男子で遊ぶこと。目標はみんなをまとめること。よろしく！」

ん？趣味が変？これがあたしだからしょうがないっしょ！！

「俺は五の三の中原圭太。日高と同じく委員長で、趣味は……いたずら。よろしく」

いたずらあ！？まあ圭太らしいことは圭太らしいんだけどね。

「ちなみに、いたずらは日高が対象だ」

「ちよつと待ったあ！！なぜにいたずらがあたし対象なのでしょうかあ！？」

「五月蠅<sup>うるさい</sup>い委員長はほつといて、次、五の四」

むう、うるさいとは何ゆえに。

「俺は美濃<sup>みの</sup>岸<sup>ぎし</sup>夏夢<sup>なつむ</sup>。女っばい名前だけど男だぞ。趣味は、友達にチョコチョコすることかな。目標……そうだな、こちよこちよの達人になること、でいいよな。よろしく！！」

おい、キャンプファイヤー係の目標言つてよー！

「次は……阿辰っちか。じゃ、後よろ」

「……ほいほい」

といったのは……髪のを“銀色”に染めたショートカットの女の子。

……ん？銀色に染めた！？

「あたしは阿辰拓露。あたつたくろ一応女。趣味は……秘密。目標は、なし」

え、ちょっと！！目標無いつてどゆことさ！！

「ちょっと！その銀色の髪は校則違反！今すぐ真っ黒にしてきなさい！！」

「は、先公が言うようなこと委員長がほざいてんじゃねえよ。この髪はうちの父ちゃんが先生だから見過ごされてんだよ。文句あつか」

「な、ないけど」

「ならおとなしく花占いでもしてろ」

「なっ　　！？」

爆発寸前になったあたしの言葉を、圭太がおせっかいにも抑えてくれた。

「これで自己紹介はおわり。日高、あと任せる」

「あ、ちょっと、待ちなさい、圭太！！」

もう、何であたしの言うこと聞かないのさー!!

いじけちゃうもんね!!

ふん!

ラウンド21・イツァ・リンカーン！ー}準備編その4・自己紹介だもんねー

いろんな人が出てきて、訳わかんなくなってまいりました（笑）

でもご安心を。

本編前に整理しますから。

「石垣さん、意見ありますか？」

「「どつちのしょう？」」

「……どつちもお願いします」

こんにちは。引き続き飛鳥つす。

自己紹介も終わり、まずキャンプファイヤーのプログラムを決めることに。

で、またまた引き続いて、あたしが司会をやってるのだ。

「えっと、私は、その、キャンプファイヤーでは、ドラマチックな演出をしたほうが、あの、いいと思うんですけど……」

ふむふむ。ドラマチックな演出ね。

「具体的にはどんな演出ですか？マナさん」

「えっと、その、あの……」

だめだこりゃ。

「はい！あたしの案を聞いて！」

手を挙げたのは……えーっと……藍那真希さん。

「あたしは、すつごく派手な演出したらいいと思うよー！たとえば、花火がドカーン！とか、キャンプファイヤーの炎が、爆発とか！」

「即却下」

「何でよ！いい案じゃないですか」

「危なすぎー！」

「……！中原委員長はどう思います？」

いきなり話を振られた圭太は、しどろもどろだけど、はつきり答えた。

「おもしろそう」

こう、ハッキリと……ってなあ！？

「ちょいまち圭太！？アナタその光景を想像して言ってる？」

「ああ。面白そうじゃん、キャンプふレイヤーの炎が、『ドッカーン！』って音<sup>たて</sup>発<sup>て</sup>て爆発するの」

「……」

想像してみよう。

夜。

みんなが燃え盛る炎を囲んで円になっている会場。

そこで、いきなり炎が『ドツカアアン!!』と音を発てて爆発する。

その炎を囲んでいるみんなは、子供がほとんど。

そして子供たちが一斉に『すげえええええ!!』と雄たけびを上げて炎に突進。

そしてみんな大火傷。

……リアルにこええ。

「きゃ　つか!!きゃ　つかあ!!」

「「え」」

残念がる圭太&藍那さんを尻目に、あたしは続ける。

「他には意見ありませんか?」

「はい」

手を挙げたのは委員長。（キャンプファイヤー副委員長ね）

「マナさんの意見を取り入れて、『真っ白い衣服に身を包んだ天使（っぽい人）が、聖火（キャンプファイヤーの火）を持って、入場するのはどうでしょうか?』」

「意外にロマンチックだね。よし、これに賛成な人は手を挙げてー  
！！」

「へーい」

えーっと・・・圭太と藍那さん、阿辰さんを除いて全員、っと。

「はい、この案は決定です！」

ぱちぱちぱち、と音を立てて拍手する委員長とマナさんと石垣と他  
いろいろ。

そっぽ向いてる圭太と藍那さん。

どーでもいいというようにやっぱりそっぽ向いてる阿辰さん。

ばらばーら。

「他に意見は？」

「「ねーよ！」「」

あそ。

そんなこんなで、話し合いが終わる。・・・わけがない。

「だから！！天使なんてこの世にいないの！！なのに盛り上がるキ

ヤンプファイヤーで、何で架空人物出現させなきゃいけないのさ！  
！神様でいいよ」

「天使は神秘的なんですよ！？燃え盛る炎にびったりではありませ  
んか！」

いや、そんなこと聞いてないから。

ってか。

神様も、架空人物ですよ、藍那さん？

ラウンド22・イツア・リンカーン！〜準備編その5・ドラマチック理論〜

はい、休載する予定……でしたが。

三、四日で、忙しくなっていました！（笑）

ですので、君VSあたしだけは、休載取り消しにしたいと思います。

あと、このサブタイトル。

準備編その5 ですね。

これがいくつまで続くかは分かりません。

謎です。

ラウンド23・イツア・リンカーン！――準備編その5・隠れ怖い人――

「ホームルームをはじめるぞー」

ども、飛鳥です。

またまた、阿辰先生のお話を聞いておりますです。

「今日のホームルームも、林間関係だ。まず、三泊四日の、行事説明をするぞー」

行事説明。

それは大切だ。

どこで圭太といちゃいちゃできて、どこで圭太とはなれて……  
etc。

とにかく！大事なのだ！！

「はーい発表するぞー。高島任せた」

「任せましたー。じゃ改めて発表しまーす」

発表係はゆずぽんでーす。

では、発表されたことをあたしが簡潔に読者の皆様に分かりやすくここに描写（？）するよん。

<一日目>

学校集合 休憩場所でトイレ休憩 榎原<sup>まきはら</sup>モーモー牧場到着、乳搾り  
体験&ソーセージ・バター作り体験 昼食 バス移動・宿舎到着

<二日目>

宿舎出発 山登り（泰山） 山頂到着・昼食 リフトで下山 バス  
移動・宿舎到着

<三日目>

宿舎出発 うちわ作り体験 川遊び 写真撮影 昼食・バス移動  
銭湯到着 銭湯出発・宿舎到着

<四日目>

宿舎出発 お土産店でお土産を買う バス移動・釜飯を食べる バ  
ス移動 学校到着・解散

「・・・という予定になりまーす」

ということデース。簡潔だったでしょ？え、グダグダだった？そう  
言わないでよ。

「次は、お土産代金はいくらかということを話し合いまーす」

お土産代金……¥2500ぐらいかな？

「はい、決まりましたー」

決まってねえだろーが！！むしろゆずぽんが決めたんじゃ！？

「正解です」

「おまちになってゆずぽん！！あなたあたしの思考読んでました！？」

「読んでたよ」

うそん。

「まあそれは嘘だけど」

ほっ。

「それも嘘だったりするけど」

「どっち！？」

「あははー」

教えてよ。イジワルだねー、ゆずぽん。

「はい、遊びは置いといて」

遊びだったの今！？

「うん」

しくしくしくしくしくしくしくしくしくしくしく（以下略）

「泣くなあすきゃん。さて」

「オレは三千円!！」

「二千五百円!」

「一億!！」

ははは。

なんかみんな自分勝手に意見出し合っちゃってるよ、良いんですか  
ゆずぽん？

「決まりだよ」

ええ、こんな状態じゃ決まるものも決まらずに      ってはあ!？

「だから私の独断と偏見で決まったの!一億円持ってこーい」

一億円も持ってこれるかボケエエエ!!!!!

「間違えた、二千五百円ね」

「「「変わりすぎです!!!!!」」」」

「てへ」

無邪気な表情のゆずぽんに、発言しても意味はない。

なぜって？

「高島さん、そんな勝手に決めて」

「黙れ」

やっぱり無邪気な表情で、言い返されるに決まってるから。

でも。

無邪気な表情でそんなことを言うゆずぽんは、とてつもなく怖かった。

「あすきちゃん」

はい！？

「喋れ」

「は、はいiiiiiiiiiii！」

ほら、ね。

怖いんだよね、これが。

ラウンド23・イツァ・リンカーン！――準備編その5・隠れ怖い人々（後書

ゆずぼんは怖いです。

飛鳥はツッコミです。

圭太は哀れです。

以上です（笑）

## ラウンド24・ナンバー1！ハチャメチャ ルーム

「飛鳥です！」

「圭太です！」

作者です！

「今日はおまけ！……って言う名前もアレだし、決めちゃおう！『ハチャメチャ ルーム』でいいかな。今回は、またまた登場人物を紹介しようと思います。あと、ちよっと『その他』の部分があるけど……」

はい、飛鳥の発言とおりです。今回は、『これまでの登場人物』と、『その他』を紹介します

あと飛鳥、その名前……いーね！

「でしょ！あ、この話……もういいや！なんか番組っぽくしちゃえ！この『ハチャメチャ ルーム』は、作者と実際の登場人物が、読者様から時たま寄せられる、質問や意見に答えるかも知れない君あた専用情報発信番組！？です！」

「いいのかよ作者！……いや、ボケどころ不明だし」

うるせー圭太。出演禁止にするよ？

「やめろ作者！出演禁止なら日高にしろ！」

じゃ、その言葉通り飛鳥を出演禁止にするけどいいのかな？

「ああ」

で、レギュラーが圭太だけになる。ツッコミがいなくなるだけいいのかな？

「・・・う」

で、一人寂しくなつて、『俺も出演禁止にしてくれ』って言い出すよ？いいのかな？

「・・・うつうつ」

本当にいいの？決定？

「・・・撤回をお願いします」

それでよし。

「なんか作者、すごくドSになつてる気がする」

いや、現実にはドMだよ。たまにはいじめてみたかったんだ

「自分でドMって言うなさ」

「・・・俺は日々ストレスのはけ口に・・・」

仕方ないの。こういう圭太を望んでいる作者様もいらっしゃるんだから。

「じゃ、とことんいじめようね、作者」

うん

「俺は・・・どうなるんだ・・・」

壊れるでしょうね。はい、自己紹介に入ります。

「おー!!」

レギュラーは覚えてますでしょうし、ここはラウンド8からの登場人物を紹介しようか。

「おつけー。じゃ、最初は・・・うえ」

うえ？ああ、あの人か。

「じゃあ、俺が引き継いで。・・・うあえ」

うあえ！？ああ、あの人ね。では登場してもらいましょう！朝川菜摘（なつみ&なつむ）さん！！

「菜摘（なつみ&なつむ）？ああ、なるほどね。でもなつむの方はうちの学校にはいないし、いいんじゃない？」

じゃ、いいかな。それなら改めて。朝川菜摘<sup>なつみ</sup>さん！！

「はーい 圭太あー」

「いきなりそれかい！キック炸裂！」

ドンゴロゲツシエン！！

「ほげえああ！？何するのよ日高さん！？とりゃあー！」

テリヤキチキンクダサイ！！

「ふふふ、当たらないよ　これはどうだ、とりゃあ！」

ペペロンチーノオゴツテ！！

「ホンゲオゴツテエン！？おごんないわよペペロンチーノなんか！とりゃ！」

サクシャススメナサイヨ！！

「うるさい！これならどー

」

はい、菜摘から依頼を受けた作者、司会しまーす！

「俺もいるぞー。さて次は……ラウンド12の登場人物……

・多っ！！」

そうなんですよー。多いんですよー。

というわけでして、まだこの話でしか登場していない人たちを紹介しちゃいましょう！。

「了解。じゃあ最初は……飛鳥兄・健さんからだな。」

はい。飛鳥のお兄さん、本名日高健<sup>ひだかけん</sup>さんです

「よお！読者の皆さん初めまして。健です！歳は二十三。彼女募集中さー！」

健には彼女つくらせません。むしろ途中で存在じたいを消しますの  
で。

「おい、そりやないぜベイベ」

「次は……いちおう中原家の亭主、竜郎なんだけど……いないしね」

うん。じゃ、紹介だけ。中原竜郎は、闇と子羊団体会長。そして、圭太の義理の父です 以上。

「じゃ、次。日高のお隣さん……っておい？日高あ？」

飛鳥は只今菜摘と戦闘中です 今しばらくお待ちを あれ？  
飛鳥、終わったかい？

「うん、すつきり」

「ああ……激しかった……でもなんかピーな感じでピーな予感だったわ……」

飛鳥、アブナイことしてない？

「してないよー ただ朝川さんがこれいじょう圭太に夢中になんないように、催眠かけただけー」

……置いていて。

気を取り直して！飛鳥のお隣さんの中学生・舞田朱里さんです！ど  
うぞ！

「こんにちは 愛名女学院中学生の、舞田朱里です（＞Ｏ＜）！結構頭はいいほう。現在彼氏募集中です よろしくー」

こらこら朱里。健みたいなこと言ってんじゃないやありません。彼氏なら作ってあげるから、ね？

『作者ーなんで俺は作ってくれないさー』

あははー作ってあげるかもしれないから。叫ぶな。喚くな。喋るな。

『しくしくしく』

泣くな。つくってあげないよ？

『はーい』

うむ、素直でよろしい。

「作者ー、健兄さんと朱里姉さん片付いたー？」

片付きましたよ。えーっと、つぎは……あ、キャンプファイヤー係の紹介ですね。

「そういうこと。今度は俺が紹介するからな。ん？……げげ」

ん？どした、圭太？

「なんか裏の人が、『時間押してるから、早くして』だとさ。というわけで、ここからは箇条書きで進めていきたいと思います。あ、あと、『キャンプファイヤー』は、『CF』と略すぞ」

はい、そういうことです。では、どうぞ

## 五年一組

・担任 柊久美子

学年主任。とてつもなく怖い先生。何かあると放送室に駆け込む。

：CF係

・大橋知樹  
おおはしともき

サッカーが趣味の丸刈り少年。

・藍那真希あいなまき

趣味は運動。何かと圭太にくつつく他人。じゃまもの

五年二組

：CF係

・澤本歩夢さわもとあゆむ

結構おとなしい性格で、趣味は勉強。眼鏡がよく似合う

・石垣マナいしがき

亮祐の従妹で、趣味はピアノ。緊張すると結構喋れなくなる。口下手で、はにかみや。

・石垣亮祐いしがきりょうすけ

マナの従兄。趣味は運動全般。マナの反対で、緊張するといつもの倍以上喋る。クラスの超人気者。

五年三組

：CF係・・・いつか。

五年四組

：CF係

みのぎしなつむ  
・美濃岸夏夢

一応男。趣味は友達にこちょこちょすること。拓露の事を『阿辰っち』と呼んでいる。

あたつたくろ  
・阿辰拓露

一応女。髪の毛を銀色に染めた、思いつき校則違反している。父親が巽小の先生。

「終わりだねー・・・ちよつと！何で五年三組のとこだけ、『ま、いつか』なのよ！」

だって、君らレギュラーでしょーが。いいじゃん別に。

「俺も今回は作者に賛成」

「むっ」

こら、飛鳥いじけるな！

「はい。・・・ちよつと待って？」

何、飛鳥？

「作者さ、このおまけ　いまは『ハチャメチャ　ルーム』だ  
けど　をやった〃お便りが来たってことでしょ？」

そうです。

「わお！！」

一つですが、質問が来ました！

「じゃ、俺読むな。ペンネーム、『家庭調査希望班』さんからのお  
便りです。」

「どこを調査してるのよ」

「だから家庭だって書いてあんだろ。えっと、『ラウンド18から  
の質問です。なぜ副委員長は、圭太も委員長だと分かったのですか  
？』だと」

はい、これは作者がお答えします。

一言で言つと、『勘』ですね。

「一言すぎだから作者！」

むう。じゃあ、詳しく言いますと……これは歩夢に答えても  
らったほうがいいかと。

「じゃあ、委員長に答えてもらうか。いでよ、委員長！」

委員長が現れた！

「ホントに出した。日高すげえ」

「えっへん」

「あの・・・質問に答えてよろしいでしょうか？」

「「あ、どぞどぞ」

「はい、黒い垂れ幕のところに『日高飛鳥が委員長だ!』と書いてあったといいましたね?」

「「うんうん」

「で、その下のほうに、それはもうすごく小さく『中原圭太も委員長でした(笑) by 阿辰則道^^』と書いてあったのですよ」

・・・ちーん。

「あ、あの・・・皆様、どうかなされましたか？」

「あんにやろお・・・ブッコロス」

圭太、そんなことこんな番組!? つばいところで言っちゃ

「あの先公か・・・俺を忘れやがったのは」

け、圭太

「フザケンナ

!!!!」

ピン、ポン、パーン、ポーン。

お待ちください。

ポン、パン、ポーン、ピーン。

「ゼーハーゼーハー・・・作者、ご愁傷様だぜ 俺様になうと思  
うなよ」

えー・・・作者はどうなったのでしょうか・・・ね？

あ、あたしは作者じゃないよ、飛鳥だよ

「えー、当番組ではこれから、読者様の素朴な疑問・クレームも  
大募集 送る場合は、メッセージ・感想欄にお願いします。あ、あ  
と、『番組に載せてもオツケーだよ』という方は、最初か最後に  
“ハチャメチャ用”と書いて下さいね」

はい、そういうことですので・・・ではまた、区切りのいいいつ  
か、お会いいたしましょう・・・ゼーはー・・・

「作者、蘇ったか・・・勝負！」

えー、作者と圭太の乱闘をバックに、さよならしたいと思います  
ではまた、いつか。

ハチャメチャ・シーユー

この番組は、君あた登場人物の提供でお送りしました

## ラウンド24・ナンバー1！ハチャメチャ ルーム（後書き）

はい、そういうことで“ハチャメチャ ルーム”発信開始です！

また次からは林間！

本編はいります

あ、あと。

家庭調査希望班さんからの質問が、もう一つ。

『登場人物の家族構成を教えてください』とのことですが。

飛鳥家は三人家族（母、兄、妹）です。圭太家は……説明するまでもありませんね。

他はいつか公開しますので、楽しみに。

ラウンド25・イツア・リンカーン〜本編一日目・午前〜

「ふわぁー」

おはよふです、飛鳥なのです。

今日は林間初日。 6：30 学校集合      5：00 前には起きなければいけないので、いつも6：30 起きあたしにはつらいのです。

「眠重い」

眠重いつて何かって？眠くて重いのですよ。だから何が重いのかって？

荷物ですよ。

あたしは今、腰まであるリュックサックを背負って、たちながら並んでいます。重いです。

ちなみに今は、6：25。あと五分の我慢です。

五分たてば、フカフカのバスの椅子に座れる……！！

「ふにゃ〜」

「……日高、顔が、顔がとてつもなくとろけてる！誰にも見せられないような顔だ！」

「圭太見てるでしょうが〜。ふにゃ〜お」

あゝ早く、早くフカフカの椅子に座りたくい！

「・・・・だか！ひだか！日高ああああ！！！」

「ごはおい！？なんじゃい！？」

「前進んでる」

「あ、ホントだ」

見ればあたしの前には大きなスペース。前の人が進んでいた。

気がつかないうちに五分間経ってみたいのです。

「フツカフカゝ フツカフカゝ 座った瞬間に眠るのも良いなゝ  
それはあとで考えよゝ」

「・・・・・・。」

鼻歌混じりにこんな歌を歌うあたしが、周りにドン引きされたのは  
いつまでもないか。

「カッタカタゝ！カッタカタゝ！期待外れにあたしがこのバス会社  
をドン引き！」

はい、バス乗車後の飛鳥です！

硬いです！

イスが硬いです！

期待はずれです！

ついでに隣の席の人も期待はずれです！

「・・・・・・・・ちえ」

「ちえじゃねえ！何であたしがあなたの隣なのよ！訴えてやるわ！」

「そう思ってるのはあたしも同じだよ、朝川さん。こっちがてめえを訴えたいほどだよ」

「・・・・・・・・けっ」

はい、バス席“だけ”は当日のくじ引きで決まります。そして、圭太は川島さんの右隣、あたしは・・・・・・・・朝川さんの左隣。

はつきりいましょう。

ビバ！

最・悪っ！！

「・・・・・・・・あなた、なんか変なこと企んでないわよね？」

あ、あたしの口調と朝川さんの口調は似てるからご注意。『わよ』

とか『うん、朝川さんに爆薬飲ませようかとかそのままバス爆破しちゃおうかとかいつそのこと地球崩壊しちゃおうかとかそんなことこれっぽっちも考えてないよ?』

大量に考えてるけどね。

「あたしだって、日高さんに圭太嫌いになってもらおうかとか身の毛ががよだつほど苦手になってもらおうかとかいつそのこと消しちやおうかとかそんなこと考えてないわよ?」

めっさ考えてるやん。

『え、こちら実行委員。聞こえますか?』

突然の放送。あ、これゆずぽんの声だ。

「「「聞こえてます」「「「「

『マイクセット完了です レク係さんにおつなぎします』

ガサツ、という音がした。

どうやらゆずぽんがレク係にマイクを引き渡したらしい。

『え、こちら、レク係。これからゲームをはじめます』

いきなりかよ！？・・・まあ、それはそれでいいけどさあ。

『最初は、実行委員が考案した、隣の人に本音を言い合うゲームです。嫌いなところ、良いところ、ウザイところ、キモイところ、バンバン言い合っちゃってくださいね』

実行委員      ゆずぽん。

ゆずぽん、アナタケンカ売っておいで？

「あたしは日高さんの圭太が好きなところが嫌い」

「あたしは朝川さんの圭太が大好きなところが嫌い」

「じゃああたしは日高さんの圭太が大好きなところが嫌い」

「じゃあじゃああたしは      （以下略）」

「じゃあじゃあじゃああたしは      （以下略）」

『はい、これで本音言い合いゲームを終わります。次は・・・（え、こんなゲーム企画されてない！・・・しゃーねえ、やるか！）次は、伝言ゲームをします』

伝言ゲーム・・・後ろから回ってきた言葉を、前の人にそのまま回す、結構大変なゲームだっけ？

『今回は都合のため、前から後ろに回してもらいます。では、

最初の言葉を……伝えました！ゲーム、スタート！』

こしょこしょこしょ。

一番前の人が、次の列の人に、こそこそ話で耳打ちしていく。

あ、ちなみにあたしの列は前から六番目。圭太たちは五番目。

あたしは川島さんから伝言を聞かなきゃいけないわけか。

だがしかし。

予想以上に早く回ってきてしまったわけで。

そしてすごく暇なわけで。

あたしは斜め前の圭太の様子を器用に覗くわけで。

あ、今圭太に前列の人が耳打ちしてる。

あ、今圭太が頷いた。

あ、今朝川さんの耳にその伝言が

あ、なんか朝川さんが怒ってる。

盗み聞きしましょう。

「……………はあ！？何でそんな伝言！？」

「前から回ってきたんだから、回せ」

「……むう」

説得されちゃったらしい朝川さんは、仕方なく回すことに。

その時。

圭太がニヤリと笑った気がしたのは、気のせいだろうか……。

『それでは最後の人、発表をどうぞ！まずは……っと？』

お、なんか困ってる。きつと四列あるうちで、どこからやろうか迷ったのか、もしくはこのゲームすべてアドリブなのか。

『……げ、仕方がないか。では、最初は高島チーム！どうぞ！』

おそらく後者だろう。ってか『……げ』ってなにさ。

あ、一応言つとくと、高島＝ゆずぽんね。ちなみに、ゆずぽんの列はあたしの列の隣の隣の隣＝一番右列（あたしの列は一番左）。

さう、どんな言葉かな？まー、違ってもうちの列の言葉がたぶん正解……なのか？

「はい、言葉は『マラリア感染症の増加により素人八人海防』ですっ」

ぽくぽくぽくぽく、チーン。

「……ちよつと、レク係。ツツコンでいい？」

『どうぞ』

許可をもらったのを確認！大きく息を吸って、さん、はい！

「ちよつとまでどこでマリア増加したあ！？そして素人って何の素人さ！？そして八人海防で何！？その素人たちがみんな海を守ったのか！？そしてなぜにマリア増加により素人八人さんがみんな海を守らなくちゃいけないのかなあ！？ってか海防ってなんて読めばいい！？ああそうですか自分で読めですかはいスミマセン！  
！」

ふー、スッキリした。モヤモヤ解消！

『日高さん、落ち着きましたー？スッキリしましたー？お通じ良くなりましたー？』

「下ネタ使っとなっ！……や、この声はゆずぽんだ」

『あつたり〜』

「あたりじゃないっ！レク係進めてえ（泣）！！」

『なんで（泣）なのかは知りませんが……進めましょう。次は、Bグループお願いしま〜す』

あ、Bグループは圭太の列のとなりね。……あれ？

何でここだけB？BがあるならAもある？

どこに。

「Bグループは、『キンコンカンコーン』です」

どこッコミすれば!?

いやむしろ捻りがないところをッコミベキか!?

「なぜに学校のチャイ

」

「次いきまーす。次はA+グループでーす」

コトゴトク無視してくれてありがとー。フザケンナ。A+ って何ゆえに。ってか圭太のどこじゃんか。面白そう。観よう。

「A+ グループいきまーす!言葉は、『I・L O V E A・S U・K A!b y 圭太』でーす!」

・・・・・・・・・・・・・・・・ピキ。

ん?

場が、凍る。

そして、背中と横腹に寒気と視線を感じる。

きつとそれは

「ひいだあかああすうかあ．．．．．呪い殺すうううう！！！！」

めっさ怖い圭太LOVEな人たちだ！

いや呪い殺さないで！怖いから！

「恋の恨みは恐ろしいべさー！！！！！！覚悟しろー！！」

いやそれ以前にあなたたちのほうが怖いです！めっさ怖いです！ああお願いしますやめてやめてくださいお願いしますう

．．．．．ちーん。

「．．．．．紅い呪いは恐ろしい．．．．」

『え　、つとお．．．．．何があつたのでしょうか、ね？』

「ま、あの言葉は嘘だしね　信じた奴らが悪いと俺は思う」

．．．．．ぷちっ

「圭太あああつあああああ！！！！恨みころーす！！」

「んな滅相もない！！！！」

どんがらがっしゃーん。

）  
）

「着いたあああ!!」

やっと着きました榎原モーモー牧場!

「空気がおいし　　そうでもないか」

「い・・・言いかけてそれはないんじゃないか?日高あ・・・」

はい、戦闘疲れした圭太がいつの間にか横に。

蹴りました。

「うがぁ!??ごろごろごろ・・・」

圭太は変な声だして、どっかに転がっていきましたとき。

「お・・・おしまい」

おしまいじゃないから!

「三組!しおりをもって集まれ」

お、ゆずぼんが召集かけてる。

「圭太、行くよ!」

「おお・・・ああ、蹴られたところが痛くて動けねえ・・・」

自業自得さね。あ、方便になってる。

でもそんなに急所蹴った覚えはないんだけどなあ。

「・・・・・・・・股間は十分急所だから・・・・・・・・」

バスの中であたしをからかったあんたが悪い。

頭を切り替えて、召集つと。あ、しおりも持ってたかなきゃね。

「えっと、これからの予定を話します。まず三組は、体験工場というところでバター作り・ソーセイジ作り体験を一組と体験します。そのあと、牛牧場に行つて、乳搾り体験をし、昼食になります」

ふーん、一組と・・・・・・・・一組・・・・・・・・大橋と藍那さんがいるところ・・・・・・・・ヤバイ!!

藍那さんの視線に圭太がロックオンされる!! 圭太を奪われると同じことだ!!

なんとしてでも圭太を守らなきゃ!

「あ、ちなみに、体験班は基本四人組。バス席の前の人です」

えっと、あたしの班は、圭太、川島さん、あたし、朝川さん……  
・げげげ。

要注意人物が二人もいるではないか!!

こっちのほうが一番大事だ!

「あと、係の人に『二人組になってください』と言われることがあります。その時はバス席の隣の人とでお願いします」

……神様。

あたしの運命って、虚しいですネ。

フザケンナ。

「むにゅ……これ力いるにゃ……こら朝川さん楽するな  
!!」

「だって、こんな力いる作業できないわよ! カヨワイ少女オトメですから  
!」

ただいまソーセージ作ってます。

これがなかなか力いる作業で……。

正直疲れます。

「あたしだって疲れてんだよ！なのに朝川さんだけ樂するのはずい！」

「ずるくないわよ！じゃああんだって休めばいいじゃないの」

「そしたらあたしたちのソーセージ少なくなるんだよ！？いいの！？」

「……………」

「おなかへっちゃうよ！？いいの！？」

「……………分かったわよ。やればいいんでしょ！」

「さっすが愛を追う朝川さん！たくましい！」

「えっへん」

「男らしい！猛々しい！雄々しい！」

「男じゃないわよっ！！」

すると大音量でゆずぽんの声。や、きつと放送だ。

『あすきちゃん 朝川さん』

「「なんですか」」

『だまらっしゃい』

「はい」

うつ……ゆずぽんこあい。

『次はバター作りですよ　がんばれ』

バター作りの説明するね。

生クリーム（でOKかな？）を、密閉容器に入れて、振る！

もう死ぬ気で振る！

死んでも振る！

OK出るまで振る！

これだけ。

『じゃあ、降れ』

「何が降ってくるんだよゆずぽん!？」

『間違えた。振れ』

その合図が聞こえた瞬間。

「ふりやあああ！！！！！！！！！」

みんなが振る！！

激しく振る！

死ぬ気で振る！

振りすぎて疲れた！

でも振る！

・・・・・・激しく振ること五分。

「づ・・・・づがれたー」

『終わりですー次は乳搾りですので体験班四人で牛牧場へ移動してくださいね』

「あ・・・・あーい」

疲れてまともに声が出ないあたしと圭太と朝川さん。まともに声が出せる結構すごい川島さん。

ばらばらです。

何はともあれ、牛牧場へれつつらー！！



ラウンド25・イツア・リンカーン―本編一日目・午前―（後書き）

はい、林間ヘレッツらゴーです！

ちなみにここに出てきた牧場や、これから出てくる林間用旅館（？）は、すべて架空なので宜しく。

股間を蹴られた圭太、ザマーミロ。

あ、も一つお知らせ！

これから飛鳥にはいい思いはさせません！

波乱万丈奪い合い殺し合い（精神的に殺し合いになりそう）、どんな遣っちゃうかもしれませんのでそのおつもりで！

あ、最後に。

三日目の夜は、肝試しを企画しているらしいと飛鳥から聞きました！しかし、飛鳥が何に化けるかは決まっております！

そこで読者のみなさん！

飛鳥に似合いそうなお化け（幽霊）を、考えてください！  
一番面白そうなお化けを採用したいと思います

なお、期限は十一月の二十五日ぐらいまででよろしくっ！

ラウンド26・イツァ・リンカーン！〜本編一日目・午後〜

「うっしぼっくじょっ！うっしぼっくじょっ！」

ども、またまた飛鳥です。え？このなんか掛け声っぽい言葉は何かって？

ご安心を。

これはバカアホマヌケ三拍子揃った圭太の言葉ですから。

断じてあたしじゃありませんから！

断じて！

「……………日高、バカアホマヌケ三拍子揃った圭太って、俺のことか」

「ねえ、日高さん、中原くん」

「あんたしかいないでしょうが」

「ねえ圭太！日高さん！！」

「俺はバカアホマヌケではない。バカだ」

「そこのお二人さん？あのですね

」

「認めてんじゃないわよ」

「だから！聞いてんのかつてば！！」

こいつやっぱリアホです。

「だいたい圭太は

」

「うるせえ日高

」

二人でケンカを始めたそのとき。

・・・・・・ぷち。

なんか聞こえました。はて？

じじじじじじじじじじじじ。

やっぱりなんか聞こえます。

「君たち・・・人の話聞けつつの」

ウルサイほどなんか聞こえますね。

「みなさん、牛牧場着きましたよ？」

やっぱりウルサイですね。ってそうだったの!?

「だから話しかけてんじゃないのさ! 聞いてたっていったじゃないの! 羨ましいじゃないの! 悔しいじゃないの! 私にもそのLOVEパ  
ワーくれたっていいじゃないの!」

後半三つおかしいじゃないの! や、なんかうつっちゃった。

「だって……ねえ?」

「ねえ?」

コクコク。

「圭太&日高さん、二人揃ってなんか頷いてんじゃないわよ!」

頷きなくなる気分もわかるっしょ?

しかしこうなると朝川さんがツツコミになっちゃうなあ。あたしの  
出番ないじゃないか!

『飛鳥はさ、圭太専用のツツコミだから。がんばる』

作者の声を受け流しつつ、あたしらは、牛牧場へもーもーと突進し  
ていったのでした

『受け流すなー! ! ! ! !』

「づ……づがれだー」

ども……ぶだだび飛鳥でーず。

あえて描写はしないけど、乳搾りは疲れますね。疲れて声も変わりますね。

宇宙人の声になってますね。

さあ！

想像してご覧なさい！

声が宇宙人になった女の子が、『チチシボリハツカレマスネー』って言ってる姿を！

……おもしれえ。ってか怖え。

「……父絞って楽しいか？」

「圭太！字が違う！すごく残酷になってる！」

「お前よく気づいたな……ま、俺はその字でも別にいいけど」

「ん、なんか言った？圭太」

「別に」

そして、なんやかんやで昼食です

今日のメニューは、自作ソーセージ&バターに、パン、やっぱり自作……自搾りの生乳……ってわけにはいかないから、ちょっと工夫された牛乳。何でも、生乳がいつぱい入ってて、飲みすぎると腹壊すのだそうだ。

「ぱく、ごりごり、むしゃ、ぐっちゃぐっちゃ、ぱりぱり、ごつくんぷはっ、ぺちゃちゃ、ごり、ぐっちゃちゃ」

「あの、圭太？その音やめて。危険だから。いろんな意味で」

「ぐちゃ？ぐちゃちゃ、ごちゃめちゃんちゃ」

「何言ってるのかわかんない」

「『あ？日高、ごめん』って言ってるだよ。感じ取れ」

「感じ取れねーよ」

何はともあれ、美味しかったです

ごちそうさま

「今度こそ、空気がおいしー！」

やっと着きました！

え？何処にかつて？

宿舎ですよ！

赤城市林間学園・あんず荘です！

「それでは三組、バス列から部屋列へ瞬間移動で並び替えてねー」

「できるかあっ！……部屋列なんてあつたっけ」

上の人の話だと、室長が同部屋の人たちを並べるんだっけ？

ん？ちよつと待つて。

室長なんて係、あつたか？

「室長つていう係ないから、キャンプファイヤー並べて」

「ちよつと待ったあ！何で室長つて係がないのだ！？」

「作るの面倒ー」

「実行委員だよねゆずぼん！？責任は！？」

「実行委員つてみんなを操れるオイシイポジションだと思わない？」

おお、ゆずぼん。

あなたは どうしてそんなに真っ黒くなっちゃったの？

「106・・・おお、ここだ」

場所は変わり、部屋の前。

あたしたちは106号室。もちろんだけど男子部屋です。

「ふあ、疲れたあ。・・・中はいろいろよ」

「そだな。・・・おい、入ろうぜ」

他の男子を促して中へ。

すると、部屋に入ったとたんに、男子がみんな倒れてしまった。

「ふあ!？」

みんな、疲れがたまってたみたい。

部屋に入ったとたん、どうやら男子全員気絶したっぽい。

「・・・うあ、情けな」

そういったあたしは、男子たちを部屋の隅へ足蹴りで転がして、荷物片付けたとき。

「そついえば、今日の夜つて何もないんだよね。男子たちがこんな調子でよかった・・・」

ラウンド26・イツァ・リンカーン〜本編一日目・午後〜（後書き）

ちょっと休んでましたが、復活です！

この林間編はすごく長くなりそうですぞww

「あああ！〜！」

ども、飛鳥です。

「おらおら！〜どうだどうだ！」

「あああ！ああつあああつあ！〜！」

問題です。今あたしは何やってるでしょーか！

正解は……！

「おらおら！〜もっとやってやろうか！カカト落とし！」

「つああつあ！日高ああ！もうやめてくれええあ！！あうっ！……  
…ちーん」

カカト落とししてます。被害者はもちろん圭太三十五世です。  
ちなみに今死んでいます。

「俺は三十五回も生まれ変わってねえよあ…………ちーん」

二回死にました。

何であたしがこんなことしてるかって言つと……

「うー、暇だ。こういう時には…ホアチャー！」

「いってー！何やるんだよ日高！」

「ん、暇つぶし」

こういうことです。

つてかまったく説明になってないし！

「ああ、死んだかと思っただあ……」

オマエもう死んでんだろーが。

『キーンコーンカーンコーン！』

ん、放送だ。

『夕食です。食堂に凶器もってお集まりくださいコノヤロー』

あ、そう。じゃ凶器もっていこ 凶器！？

放送委員何考えてんの！

「食堂にいる奴で戦争でも起こす気かー！ー！」

楽しい林間が血まみれになっちゃうよ。

怖いよ！怖すぎるよ！ある意味記憶に残るから！

「凶器……これでいつか」

ちよつと圭太！ほんとに持つてくの！？みんなを殺す気！？

「ほんじゃ俺先行くから」

ちよ、ちよつと圭太あ…

『キーンカーンコーン』

あれ？また放送？

『先ほどの放送は悪質なはずですよ。消して凶器など持ってこないようにお願いします』

あ。

あはははー。

[illegible]

放送訂正遅すぎー。

もつすでに凶器もってっちゃった馬鹿野郎けいたがいるんですよー。

『なお、すでに持つて行つてしまつた馬鹿野郎がいる場合には、知らん振りをお願いします』

「知らない」

勝手に凶器持ってた圭太なんか知らないって。本当に知らない……けど。

「圭太の馬鹿アホクソまぬけの馬鹿やろー！！！！」

次の瞬間、食堂行きの廊下を突っ走っているあたしがいましたとき。

「廊下は歩け！」

「はい！」

その次の瞬間、柊先生に怒られているあたしもいたけどね。

そのころの圭太。

『キーンコーンカーンコーン』

「あれ？また放送」

『先ほどの放送は悪質ないたずらです。消して凶器など持ってこないようにお願いします』

あ。

あははー。

もうすでに遅いし。

もう俺持ってるし。

凶器のフォーク。

「ま、いつか。あとで夕飯の時に使えば。」

意外と困っていない圭太であった。

「圭太！」

「おお、日高。お前も食べよ、早く」

「何呑気に食べてんだああ！！！！凶器どこやったああああ！！」

「もがもが、もがつが（俺の手の中）」

「手の中！？」

圭太の手の中には……フォーク。しかも今日の夕飯のスパゲッティ・ナポリタンのソースが付いてる。つまり使い済み。

「何凶器で飯食ってんだてめえはああああー！！」

「あああごめんなさい！！！！！！」

どんがらがっしゃーん。。

「嗚呼……酷い目にあつた……」

今は夕飯食べ終わって自分の部屋に帰るとこ。このあとクラスごとにお風呂に入って、寝る。

「圭太が変なことやるからだろ」

ちなみに今の発言はあたし・飛鳥です。

「でも跳び膝蹴りとアッパーカットにエルボー混ぜることはねえだろー」

自業自得だと思え。

「あ、部屋着いた。じゃお先に風呂はいつてきまーす」

最初は三組だもんね。

「先ってなんだ先って。俺らも一緒に行くんだからな！……風呂の前まで」

そりゃそうだ。風呂の中まで入ってくる変態がいるかよ。

「あふう、気持ちよかったあ……………」

お風呂あがりの飛鳥です。

林間のお風呂って広いねー、綺麗だねー、イイ匂いだねー。……あたしや変態か。

廊下を歩き、部屋に入る。男子たちはまだいない。

「男子たちまだ風呂入ってんのかなあ……………」

タオルで髪を拭きながら、パジャマに着替える。ここは男子禁制！と、廊下に足音。……何でこんな悪いタイミングで！？

「でさあ、志水のやつ、また俺に力カト落としてきたんだぜー」

「そうなのか？彰吾」

「ああ、痛かった。嬰汰もやられたいか？」

「じょーだん！絶対やだよー！」

……話し声からして、どーやら別学校らしい。もしもーし、ここはA棟ですよー？あんたらどっか違うでしょー？

「いつ、しよつと。ふう、あともうちよつと」

また足音。ヤバイ。いますっげーヤバイ状況。

「お、じゃあここだから」

「おお、じゃあな、圭太」

圭太あ　！？

余計やばいんですけど！？  
いろんな意味で！

「ふう、早く髪吹きてー」

「圭太見るなあああああ！……！！」

「ぴでぶっ!？」

ちょうどあった枕が圭太の顔にクリーンヒット!圭太、倒れちゃった。

「って、何をのん気に見てるんだあたしは!？」

なんか視線を感じるけど圭太を抱え起こす。と、開けっ放しの扉の外にいる人物と目があつた。

その人物は、さっきからいるはずなのに、ニヤニヤ笑ってた。

「あすきちゃん、ごゆっくり」

そして、そういつて扉を閉めてしまった。

「ちょ、ゆずぽん、助けてよおおお!!」

『就寝：あ、間違えた。終身時間です さつさと寝てください』

今放送しているお前が終身になれ。そしてわざわざ言いなおすその意味は何？

『特に意味は無いのであと0秒後には寝てください』

無理だから。

『ではおやすみなさいませ〜  
』

勝手に終わらすな。

『ちなみにこのあときっかり1秒後には電気は消えますのでご注意ください  
』

ご注意無理だし。ってかきっかり1秒後に消すその執念は一体何物  
ですか放送さん。

『バチッ  
』

あ、消えちゃった。

では皆さん、グッドナイト

おやすみなさい

ラウンド27・イツァ・リンカーン〜本編一日目・就寝〜（後書き）

続きます

いや、続かないとおかしいです。

ラウンド28・イツァ・リンカーン〜ひとりごと・他一名

「ふわぁぁ……………」

おはようございます(?)、飛鳥です。

ただいま深夜。

起床時間には、程遠いんだけど…………起きちゃったからしょうがない。

「眠くもないし、ね…………ふぁぁ……………」

そっついながら布団の中で伸びをする。

うちの部屋の男子たちはみんな爆睡中。  
もちろん、圭太も。

今、この静かな時間を使って、圭太のことを想ってみようかな？

二年のころから圭太のコトが好きだったあたし。  
でも、まだ告白もできない。アプローチもできない。  
あたしには、まだ想うことしかできない。

でも。

「ねえ、圭太？」

あたしは語りかける。

「あと少しだけ、想っていても、いいよね？」

圭太に聞いて判ることじゃない。

圭太に聞いてどうのこうのでもない。

ただ。

なぜか、聞いてみたくなつた。

この答えの返ってこない質問をしても、意味は無い。  
そんなこと、わかっている。

わかっているのに、尋ねてしまう自分がいて。

「・・・・・・・・馬鹿飛鳥。答えてくれるはず、無いのに・・・・・・・・」

思わず、自分に言い聞かせてしまった。

そう。

答えなんか、返ってこないはずなのに

「  
寝よ」

知らず知らずのうちに、眠気があたしを襲っていた。

今日は、いい夢見れるかな。

何だ、この気持ち………？

俺は、深夜の布団の中で考えていた。

最近、どうも変だ。

特に、今日一日。

日高が、眩しい。

日高が、可愛い。

「どうしたんだ、俺？」

胸に手を当てて考えてみる。が、胸は答えを教えてはくれない。  
当たり前だろ、馬鹿圭太。胸は言葉をしゃべったりはしないのに。

でも、なぜか。

この気持ちの正体を、俺は知っている気がした。

なぜか。そう、なぜか。

この切ない感情を、俺は知っている気がした。

「なあ………日高」

俺は語りかける。

「俺のこの感情の正体、教えてくれないか？」

日高に聞いても判らないことはわかっていた。

こんな無意味なことを聞いても答えはきっと返ってこないことわかっていた。

でもなぜか、尋ねてしまう俺がいて。

「なあ、飛鳥」

なぜか、知らず知らずのうちに名前と呼んでしまう俺がいて。

「やっぱり……変だ」

そう結論付けて、俺は睡魔に襲われる。

今日は、いい夢見れそうだ。

ラウンド28・イッシア・リンカーン〜ひとりごと・他一名（後書き）

今回はちょっとシリアスです。

ラウンド29・イツァ・リンカーン！瞬間硫黄と奇声のハナシ！

「おっはよー！！」

「ぐほあ！？」

奇声とともに元気に起床！ども、飛鳥です！

ん・・・？”奇声とともに”・・・？  
おそーるおそーる下を見ると・・・

「見かけによらずけっこう重いぞ日高・・・」

女子には絶対禁制な言葉を吐くアホ圭太を一匹発見。

「重いかいいうんじゃねえ！それでもダイエットしてるんだー！！」

「ぐっはあ！？・・・びでぶっ！でゆうあー！」

枕投げ三連発を食らった圭太は、奇声三連発をあげながら眠りに落ちたとき。

（まあ、後で冷水かけて起こしたけどね）

所変わってここは食事場。

「それでは皆さん！一緒にー！」

『いっただきまーす!!』

今日の朝ごはんは・・・

バターロールが二つ、オムレツ、ボイルキャベツとミニトマトのサラダ、スープが一皿。それに二百ミリリットル入り牛乳が一パック。これで結構満腹かな?と思つて部屋に帰ったあたしたち。でも・・・?

「お腹空いた・・・」

そう、以外に足りなかった。

バスで食べるお菓子ももうないし。他に食べれるようなものないし。

「朝食でお代わりすればよかった・・・」

どっかに食べれるよーなものないかなーと探していたら。

「おー、宇宙人日高はっけーん!」

みつけちゃった、かも。

「なんだよ、この偉人圭太様のボケにツツコミをしないとは、お仕置きだぞ?」

食べられるもん、はっけーん!

「圭太、いっただきまーす!!!」

「はあ！？・・・ぐあああああ！！！」

十分後。

「ごちそーさま」

満面の笑顔のあたし。

横には、乱闘にあったかと思わせるような状態で気絶中の圭太。

「あー、美味しかった」

「ナニガダヨ」

あれ、圭太おきてたの？

「おきてたとかいう問題じゃないだろ・・・どこ食べやがったよ・・・」

「ん？そこ」

「そこ？ああ！？俺の・・・俺のアレがああああ！！！」

その危険な発言だと思った人。だいじょぶ、あたしはそんなアブナイ人じゃないから。

たべたのは、あたしの大こーぶつ。それだけ。

「俺の・・・俺の隠しレーズンパンがない！」

大変美味しゅうございましたよ？

『放送です』

「あ、放送」

唐突に宿舎放送。ってか放送で放送っていうなよ。

『泰山への登山はあと三秒後に出発です 瞬間移動で集まってくださいね！ではスタート！いち！』

「うそ！もうカウントダウンスタート！？いそげー！」

廊下を皆でダーシュッ！

『ちなみに嘘です』

「「「嘘かよおお！！！」」」  
すーっぷ。

『実はホントです』  
だーっしゅ。

「「「どっち！？」」」

『どっちも』

「「「ムリだから!」」」

『テヘ』

「「「かわい子ぶるな!」」」

皆さんツツコミがお上手な様で。ってか何人が一度にツツコンでんの？

『百人です』

放送が分かっただらすげーと思う。  
てかさ。

そういえばあたしたちダッシュしたままツツコンでるんだよね。

このまま行くと壁に激突

『壁はどこまでもありませんよ 消しましたから』

「あんた魔法使い!？」

でも本当に壁がなかったり。

あれ？あ、そっか。

ここって玄関に通じる廊下だったりするんだもん。

「とうちゃーく！五年三組集合完了まできっかり十五秒でした」

結構早くね？ってか十五秒ってどーよ！

「二組は二秒、一組は一秒、四組は瞬間硫黄です」

他の組早過ぎじゃね？ってか四組の瞬間硫黄って何？

「瞬間に硫黄になった様ですね」

ああ、だからまだ集合場所にいないんだー……ってのはあー！？

「『四組ー！！どこにいったあああー！！』」

当然、皆で大搜索かいしー。

四組は見つかったのか？そして硫黄になった経緯は！？

次回！「事件ファイルその1『四組硫黄事件』お楽しみに！」

「……そんなのねーよ。あつたら林間どうなんだっつの」

「さあ？でも大搜索してるうちに四組見つかったからいいんじゃない？」

「まあいつか？」

『それでは皆さん、泰山に出発します！バスに乗り込んでください！』

そういえば、バス席あたし、朝川さんだったー。  
またバスの中すごいことになるぞー

あははっ

ラウンド29・イツァ・リンカーン！瞬間硫黄と奇声のハナシ（後書き）

書いててわけわからなくなりました・・・  
読みにくかったらごめんなさい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0856f/>

---

君VSあたし

2010年10月12日07時34分発行